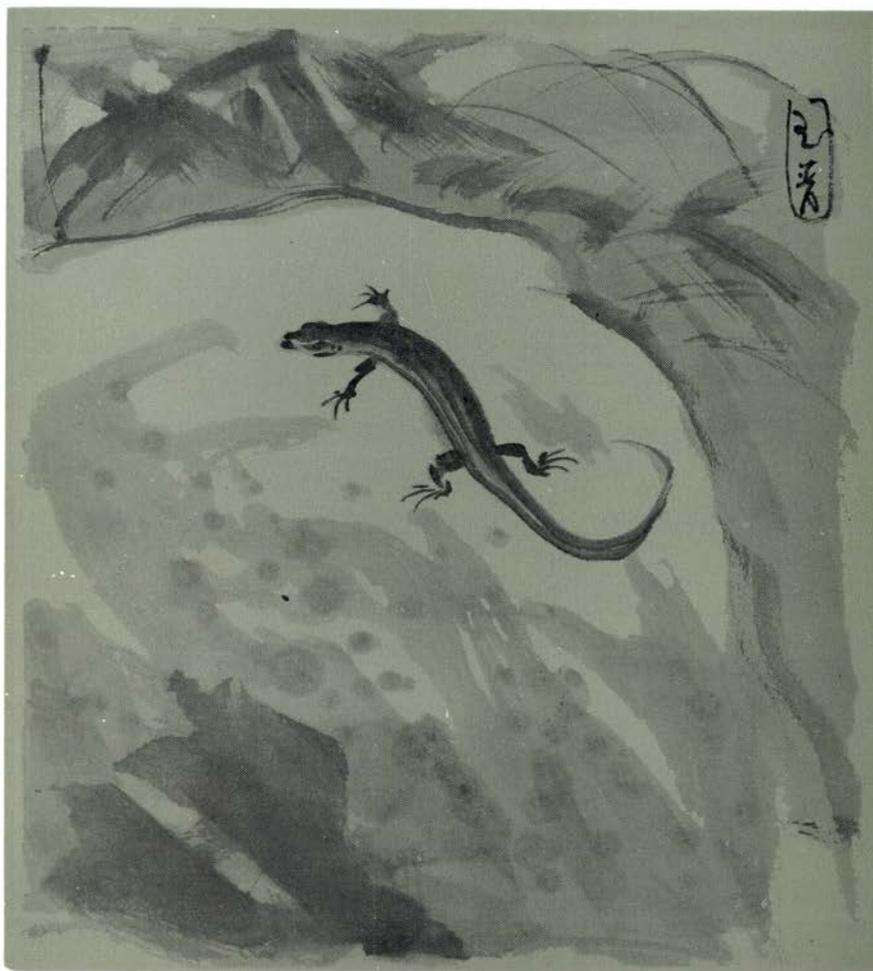


# 川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十七年五月二十五日 印刷  
昭和四十七年六月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷五四一號



No. 541

六月号

古方手書き句集！



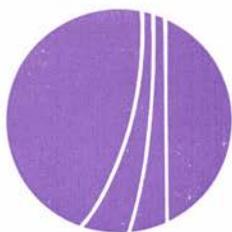
新しいスタイルの  
句集です

お申込み順にお送りし  
ます

頒価・八百円  
(送料本社負担)

ユニークな作風と美しい水彩画入り

川柳塔社同人の胸にかがやく



シンボル・バッジ

一個 五百円  
(送料本社負担)

木曾路を訪ねて一泊吟行句会と東野大八先生の柳話の会

(6月17日・18日) 17日午前8時30分 ナンバ集合

大阪府立体育館前バスツアーで出発。

宿泊地 恵那峡グランドホテル ・ 会費 6,500円程度

お買物は  
4都を結ぶ  
大丸へ！



大阪・東京  
**大丸**  
京都・神戸

明日のくらしの  
コンサルタント



アベノ店

上本町店

奈良店



 **近鉄**

TELアベノ店621-1231・上本町店779-1231・奈良店33-1111

サンキュウだけ言えてアメリカの旅に立ち

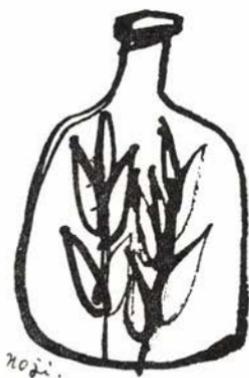
米会話孫がテープを貸してくれ

パスポート迷い子札です老夫妻

日本語の通じるホテルたのみます

さあ胸を張って羽田の老夫妻

中島生々庵



## 人 恋

近頃恋愛とか恋人とか言う言葉が実に軽たくしく日常の中に交わされているのに私はとまどいを感じる。会社の食堂でとる昼食並みの考え方でこの言葉がやりとりされているとすれば、それがどんな結果を招来するか寒心に耐えない。銀座や心齋橋を肩組んで歩くうきうき時間、あんなのはほんとの恋人や恋愛の姿でなく、いわば野良犬や恋猫の類である。その浅薄さ無意味さは寧ろお気の毒様の感じをうけるだけである。「藍より青く」の周一が真紀子に寄せたように秘かに燃えながら一

人戦場に消えてゆきたい恋情。八百屋お七、清姫といった湧きたぎる熱情。或は二人の仲を裂かれた娘が遠い空に思い焦れ、風雪の中に坐りつづけたまま石になって終った物語。この位のはげしさと真剣があつてこそほんとの恋愛とか恋人とかの意味を噛みしめる資格もあり最高の倅せ者でもある。恋愛とか恋人とかいう言葉を辱かしめないでほしいと私は願う。「よまんどし書かん同士の恋も恋」といった埋もれたような庶民の恋にも尊いものが輝くものである。

川柳塔六月号

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

また転ぶ起きる男の貌である

小幡里風

### 川柳塔六月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

恋人……

中島生々庵……(1)

盲人のぼくに……

高鷲亜鈍……(2)

川柳初篇研究……(百七)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄十府・岡田甫

……(20)

柳樽休刊異聞……

東野大八……(22)

「旅人」以後の麻生路郎作品……(17)

傍島静馬……(26)

川柳塔(同人作品)……

西尾菜選……(4)

近作柳樽……

菊沢小松園選……(30)

一分間の柳論……

直原七面山……(25)

秀句鑑賞……(同人吟)

若本多久志……(28)

……(近作柳樽)

川村好郎……(29)

近詠……

諸家……(27)

## 盲人のぼくに

高鷲 亜鈍

盲人のぼくに冷たい別なぼく

どこまで叩きのめすのか盲に半身不随

原爆症を思え深刻ぶるな盲ぐらい

ショウマンシップめくらが上手

死の直前に眼が見えるとか

それは無理めくらに財布捜させる

もめぬけど背中ぐらいは掻いてやる

原因は女泣かした罰ですよ

一人に一人ヘルパー欲しい福祉さん

黒人の眼にも白いものは白色

黒人も僕も一つ世界で生くさだめ

舌出してあられか雪かたしかめる

音量を大にしてから便所にいそぐ

手掴みで口に入れてる盗み食い

禁煙を申しつかった留守居役

尻餅をつけてピエロに早代り  
杖さして溝け伝いに訪う隣家

川柳五十三次……(二十一)	富士野鞍馬……(42)
探柳への出発……	戸田古方……(24)
山陰紀行……	西尾菜……(39)
「先生漫筆」……	室山三柳……(44)
ごだやら千一夜……	石丸弥平……(46)
雅号ぶっちゃけばなし……	林瑞枝……(6361)
パチンコ……	八木千代……(51)
静観堂先生を訪う……	不二田一三夫……(41)
初歩教室……	一三夫・新之助……(50)
大萬川柳「家」……	本田恵二朗……(52)
柳界展望……	川村好郎選……(54)
本社五月句会……	(庸佑)……(56)
各地柳壇……	(文秋)……(60)
一路集「小走り」……	久米奈良子選……(48)
「仮面」……	浜畑胡蝶選……(49)
「長生き」……	不二田一三夫選……(65)
編集後記……	(一三夫・葉子)……(65)



代筆にタバコぐらいは吸わせてよ  
 社会復帰電話当番もその一つ

月は外に世界は内にあるものよ  
 春雷へ石はつんばのままである

石の中に石の内臓が詰ってる

玉ゆらのいのちを惜しめ花ひらく

雲の上の天はそのまま人は人

詩の虚実白狐の面と鬼瓦

バラ色の空 空の色なるバラにふれ

鶏声に身を投げかけて歎泣くペテロ

森の奥鳥居の奥に宮の鈴

真清水の汲めどもつきぬ竹柄杓

燃える燃える燃える燃える燃えるガス

噛み砕く辛い辛い自我の悪汁

天に声あり石は石のままにしておけ

毛虫から蝶蝶になって死にたいね

紫の悪魔的なる秋茄子

てのひらに翅粉をのこす思惟のむくろ

浴場の隅でアルルカン泣きじゃくり

カタルシス毛虫の青い吐血かな

純粹の花開かせて無私無欲

澄む秋のところに病める百合の花

川柳塔

高槻市 若柳潮花

物狂いお夏へ秋の陽がしずむ

濡れて咲く花に廓の江戸桜

男打つしよさ茶帛沙の紅が燃え

舞い落ちて匂いもとめぬ花にあり

名木と云われ激しい花をつけ月ヶ瀬から高山ダムへ

カメラから見る梅溪の雲の白

大阪市 橘高薫風

ひとりよりふたりにこわき屏風波

反葬は雪の巔から李花の里

琴古く曲新しくいのちの譜

水浴びの鳥を見ている人妻か

妻にめんめん子にめんめん夕桜

岡山県 浜田久米雄

五月三十一日渡米六月十四日帰国

タラップへわたしの運は天任せ

飛行機ははじめて乗るといふ旅路

西尾 栞選

片言で話せる参考書を探し

ネクタイで食堂に行く旅に発ち

旅鞆入れ歯の予備をたしかめる

大阪市 本多柳志

国賓へ集める鹿の頭数

虎穴まだのぞいたこともなくて老い

気がつけば京も大和も散りはじめ

許容量ぎりぎりという水を飲み

大器晩成信じた腰が痛くなり

大阪市 正本水客

人影が濃くなってきて旅の朝

ひのなの紅が旅を湖北の味にする

鴨渡る町に老舗のうなぎ焼く

しだれ桃名もなき社去りがたく

車くるま蟬丸の感傷にかかわらず

倉敷市 本田恵二朗

未来には触れまい老いの差し向い

老婆のハッスルあわれ漫画めく  
老婆の歩巾がすっかりして幸  
いたわりの声を侮辱と聞く落ち目  
流れ雲見つめてヒッピー腹がへり

青森市

工藤甲吉

歩道橋から見下ろす街の葛藤図  
天気晴朗を無職はむなしがり  
泣く奴があるかと叱る方も泣き  
年々新生蓆のおお うらやまれ  
働けば叱られそうな国となり

松原市

谷垣史好

おばあちゃんの若さグリルで食べたがり  
己れに腹を立てながら観るポルノ  
河馬悠然と四次元の顔である  
流行が交ったんよとねだられる  
バナナはおぼる口紅の生々し

神戸市

小浜牧人

春爛漫ホットドッグがよく売れる  
朗報を話題の酒に酔いすぎし  
メロドラマ欲求不満募らせる  
謎を解く鍵が死角においてある  
桜吹雪となつて散りゆく舞を見せ

大阪市

山川阿茶

前衛の和の字へ明治親しめず  
たのまれりや一つおぼえの和の字書き

皮フ科医の皮フ病皮フ科で診て貰い  
長生きの秘訣きかれる年となり  
お稲荷さんのお告げで来たという患者

宇部市

石川侃流洞

足洗うきっかけ母の愛にふれ  
あぶく銭一日じつとしておれず  
勤勉にあけくれ日本嫌われる  
元気でなだけで通じる父の愛  
こま切れのネタで週刊特集号

和歌山市

垂井葵水

コンピュータにかけたらもしや逢える人  
ヒマを持て余していても急ぎ足  
要領の悪さ律気の名に隠れ  
お世辞抜きでという嘘の美しさ  
胸襟を開き手の平返えされる

竹原市

森井菁居

男なら酔うてみる手もありはあり  
馬鹿な奴だと悔んでも身内なり  
倦怠期だとは見せない磯づたい  
かも知れぬから胃カメラが恐くなり  
金もつてから革新へ背を向け

倉敷市

小野克枝

その顔にえくぼがあつて叱れない  
も一つのころ大事に今日を笑む  
大切な夫と思えば割切れる

不完全燃焼それでよい出逢い  
太陽をまん丸く画く子では無い

京都市 都 倉 求 芽

空箱だけれど想い出詰まってる  
通り抜ける風が部屋を春にする  
送り出す一言妻として嫁として  
咲かすのも雨 散らすのも雨  
桜から桜へ蜜蜂のようにカメラ

倉敷市 本 田 八 笑 人

鈴が鳴る灰色の穴のぞく時  
レバー刺すフォークの方程式を解く  
火酒乾してなお凍てつきぬ霧の性  
黙然と濤を切り裂く巖の孤や  
蝶の舞う下に動かぬ蟻がいる

出雲市 尼 緑 之 助

春一番霰をまげて脱く度肝  
土地動くああそろばん玉に乗り  
ああこれも腹の立つことなり老いの愚痴  
逃避する酒かひとりも悪からず

ある結婚

二人三脚いざはばたかん幾山河

兵庫県 遠 山 可 住

一ぱいが出るので悪い方の靴で行く  
かげろうが写りそなシャッターに子を付たせ  
トイレからつくづくあらためてみる桜

雨の音僕に働く場所が無い  
平和行きついて巡査がよけい要り

松江市 中 川 晃 男

われを濟度し給うか白もくれんは花ざかり  
どの絵具で塗ろうか宍道湖の夕陽  
キッチンで追い廻されている平和  
白靴に赤いクリーム塗る自虐  
赤字のローカル切つて夢の新幹線

倉敷市 水 粉 千 翁

あっさりと拳を開くとき男  
国境をもう人情は越えていた  
嬉しさが包みかくせぬ意地を張り  
窓開けて思い直せる空があり  
おもしろいだけで大言壮語聞く

大阪市 中 川 滋 雀

親鸞聖人御遠忌に会し(二句)  
宗祖にもとどけ庄巻の大読経  
真心は末尾に光る志納札  
帖尻が不思議に合うたあと始末  
頼まれるうちが花やと胸に決め  
一周忌去年も同じ春の雨

堺市 吉 田 圭 井 堂

尊徳が魂消て御座る使い捨て  
軒並に億万長者寺無住  
明治には見るもの聞くもの勤にふれ

土地つきで金百円の植木鉢  
連休も働き続けて事故で逝き

島根県

堀江正朗

色のない暮らしいらだつまい春よ  
見えぬのに色で歯ブラシ決めてくれ  
意地張って座れば的にされる位置  
子に会えるその急行のじれつたさ  
失明のそれから知った手のぬくみ

倉吉市

奥谷弘朗

下積を悟り切つての事務さばき  
父さんを卒業せずにおじいちゃん  
役付になって石橋叩きすぎ  
底抜けの馬鹿には仲々なり切れず  
四捨五入した満足にあまんじる

鳥取県

谷無閑

三寒四温神経痛が先に知り  
復習に母さかさまから読んでゆき  
六法全書何の取り柄もない男  
ホステスも家では教育ママとなり  
奥様が美人で転任おしまれる

米子市

八木千代

いさり火ゆらゆら生活の灯と見え  
ぬるま湯のくらしに硝子ごしの夢  
悔いひとつあり鏡拭く手をやめず  
初孫へ妻別口に貯めかける

窓口の不機嫌へなお媚びている

大阪市

天正千梢

お互のやすりで丸くなったと思ひ込み  
話の解る老人できらわれる  
断絶へ気やすめに引く対角線  
可能を与えられ運命をも打開  
及ばざるものあゝ如來に任せきり

岸和田市

高橋操子

宿の庭一廻りした妻揚枝  
お彼岸の基地へ球根埋めてくる  
イニシャルを互に秘めたペンダント  
春の丘子供のように走りたし  
長命の相へ計かく立て直し

貝塚市

野坂つき子

潮時へなぜか云えない胸のうち  
甘えたい言葉が出ないタイムイング  
背を向けて彼の出方待っている  
握ぎられた手へ抵抗の力込め  
ピーナスの表情鏡へ話かけ

倉敷市

野田素身郎

あの方が見舞に來そう薄化粧  
敬遠の四球のような辞令が出  
赴任よりも先に届いていた酒量  
書いてあるとおりの症状春寒し  
また妻に手数をかける土筆摘み

富田林市 岩田美代

表情の崩れを見たり札の私語  
後悔が期待した程湧いて来ず  
ふん切りのつかぬある日を持って余し

沈黙が寒くてやき芋買うて来る  
うす眉の細さに雛の愁いとも

香川県 岡田奉法

鋭意努力して法案の骨を抜き  
追求は大臣辞任で立ち消える

陳謝より配慮の欠けぬ首相出よ  
かと言うて赤軍みたいにようせんし

役員会声の大きな案通る

尼崎市 黒川紫香

早出して駅の冷たさふと感じ  
特急を見送る肩に桜散る

見晴しへ知らぬ同士が腰を掛け  
悪知恵のあるのが車座にして話し

寮の昼同じ時間に雀が来

八尾市 香川酔々

天馬かも知れないおれの乗った雲  
ある日ふと引金ひいてみる天使

絵踏みした足跡残す砂浜か  
革新が重荷となつて来た市長

修業してやっとタレント僧になり

堺市 吉岡青香

裏切られたような気持ちで嫁がせる

この先を言えば相手にきずをつけ  
呼ぶ筈のない声を聞く夜のうつろ

殊更にうかぬ顔して遅刻する  
大阪の血がこの話捨ておけず

大阪市 本庄金三

長男の結婚を祝い

初一念つらぬき晴れて愛の園

ハネムーン雨の金沢桜咲く

久々の帰省へ白魚の舌ざわり

牛乳を断つといつてやと旅へ立ち

石塔に宝曆とあり御先祖様

大阪市 不二田一三夫

ぬれた枯木になおも火を点けんとす

ノール賞作家川端康成自殺(47・4・16)

「堂々と真向きの顔で」巨眼閉す

「連合赤軍」大虐殺

山犬のオスメスへ舞う黒い雪

寄席

やめたくももう出口のない老芸人

おくれじとポルノ講談ホモ漫才

宝塚市 傍島静馬

仏門に帰依して勘定高い人

肝慎なとこで尻込みする弱気

入院するまで孝行の真似もせず

死ねそうもないのがいちばん死にたがり

大阪市 西 出一栄

人生の帳尻そろそろ合わさんか

サンガラスおんな掛ければ妖婦めき

哀愁は齡の重みに耐えかねる

柳友の来て病人のようでなし

門真市 福島 鉄児

ゴールインはばむ砦の険しくも

赤電話話す順序をメモにする

プラットを花の予報が春にする

ささやかな義理に危急を救われる

鳥取市 河村 日満

連合赤軍山荘事件(一句)

まだ突つ込まんのかと責任のない言葉

彼岸立墓(二句)

ご先祖の不運彼岸に降る豪雨

精進の悪さは僕かご先祖か

妻入院

入院三日もう退院のことに触れ

高槻市 福田 丁路

田が売れて皆目読めぬ軸をかけ

逝く春を惜んで渡る丸木橋

一輪の椿に偲ぶお家柄

億のつく脱税出来る身を妬み

名古屋市 吉田 水車

深沈と能の面のものおもい

婦警さんわずかに膝をのぞかせて

たたかれてやむにやまれぬ鼓の音

スパーでお前もかとの眼に出合い

岡山県 直原 七面山

酔うて帰えればそっぽ向く妻

どちら向いても公害公害

寄らば切るぞの構えへ男寄りつかず

曲ったところは曲ったままに蟻の列

京都府 大鶴 喜由

言えはしたないわねばうわさ以上にされ

奥山の花にさそうたが言い出せず

過去をさらけ出しても嫁にするだろか

性教は中途半端でいいのなり

大阪市 木村 水洞

刑罰は小物が受けるやくざ道

肩書がないので弾む縄のれん

恋愛の経験ないが悔はなく

人生の終着近く頼られる

大阪市 有信 新之助

国際的視野に日本息苦し

二号を認めてせつせと貯めはじめ

近所廻りアパートでして訝られ

バランスのとれた家計で物足りず

豊中市 戸田古方

伊勢志摩漫歩

しらしんまだ出てこない志摩の宿

錠なんかかかんで暮す海女の村

神主も何かいいたくなる静か

煙雨の構図そのまま神のいますとこ

藤井寺市 西 いわを

新築へさて古くとも金屏風

年嵩でいくなら顧問にもなれる

親しさは家族のはなし持ち込まれ

田舎からお土産というかたつむり

大阪市 江城修史

寡婦生きて女の道の詩かなし

友情の厚さに癒えて街を行く

豆まいた吾家に父が病んでいる

言ひ勝ったむなしさ夜の風へ出る

倉敷市 小幡里風

入念に鶴を折ってる拗ねている

安らぎを満たす広場へ白い鳩

別れしかない風船の糸が切れ

鼓動いませきを切ってるめぐり逢い

芦屋市 丸川初甫

退職金五年満期を乗り越える

笙の音のテンポで祝言交わされる

出勤の傘六甲の雪を指し

五人囃子春を奏でる姿にて

藤井寺市 吉岡美房

満開の桜の中を転居する

抱きしめる愛の涙にある香り

逃げそうで恋の別れを振り向かず

哀しみの終るときなし女生く

東京都 増田次章

その気持なつたとたんに邪魔が入り

悲壮感独り相撲を思い知り

ふり上げた拳見上げる悲しい瞳

冷戦を中断させる子の無邪気

京都市 松川杜的

流水へ五線譜よろしく桜が散る

満開に合わせて旅程ちと狂い

三味の音に合わせて花の散る舞台

雑沓のまつ唯中に居て孤独

松江市 柳楽鶴丸

私のヌード産まれた日の写真

倦怠期密のない花に似る

先手必勝コロンブスの卵

美しい自然校歌に残り

岡山県

出原敬一

お達者でなにより杖のあい言葉

昇給に洩れて春陽の遅いこと

適当に聞いて注いでるホステスさ

子と遊ぶ後妻で仏もうれしそう

倉敷市

松下梁水

裏街に咲いた美談だからきれい

霊峰へ鳴る法螺貝もレジャーめき

泣くときに泣ける路傍の石でよし

大穴のその一瞬にあるドラマ

富田林市

板尾岳人

振り向かぬ男の意地に似た地蔵

引いて駄目押して駄目なら噛んでみる

化けるこつ覚えて女老えてゆく

終っても幕が下りない夫婦なり

倉敷市

竹内翁童

脇役にあまんじイブシ銀の芸

失意の日酔に心をうばわれる

だまって母は背中なでてくれ

宣伝のリズムに乗ったムダ使い

岸和田市 葛城伊三郎

角棒の中に議員の子も混じり

トップ記事又曝け出た国の恥

内の子に限ってに先生困り果て

颯爽としたいでたちの爪の垢

松江市 吉岡通児

足折ったゲレンデ今日はわらび狩り

春日遅々針箱という老母の幸

いける口だが飲めぬ日もある人生

愚息結婚・小生銀婚

揃い踏み息子結婚ぼく銀婚

青森市 織田可津春

夜の時間も今日のこと明日のこと

そこまではあなたの見てるとおりなり

一枚のハガキそれでも有難し

いい時もあるさあるさと生きている

今治市 越智一水

良寛になりたし遊ぶ子はおらず

としよりが自慢しているものわずれ

花曇りそれもまたよし寺の鐘

花の留守テレビゆっくり見せてくれ

岸和田市 福浦勝晴

スイッチをひねると二人だけの部屋

タレントのダイナミックに人を斬り

事志と違い場末で描くボルノ

黄昏れの砂丘で少女脱皮する

今治市

小笠原有里

花便り咲いた散ったと聞く多忙

人間のもろさ札東向きをかえ

霧の中ドラマそっくり二人づれ

義理の二字腹へ飲みこむ今日の席

大阪市

西川誓二

写経の浄机で心にも経写す

無用の用知った居士のお人柄

主導権も財布も共に握る妻

明治を長く生き現代に背を向ける

呉市

林野甦光

宿命の出会いを話す妥協の夜

文鎮に重み履歴書疲れ果て

鮮やかな色にかくれた腐敗止め

糸切って飛びたいようなアドバルン

和歌山市

野村太茂津

笑ったぞ泣いたぞ孫は眠ったぞ

呱呱の声祖父となる日の電話口

孫生まる唯我独尊の声で泣き

孫誕生関白の座を降ろされる

平田市 久家代仕男

農をつぐ決意大地へ仁王立ち

はしゃげど孤独なかげのアイシャドウ

新任を過疎の桜に迎えられ

ステレオのリズム若葉の窓を開け

守口市 羽原静歩

長男の結婚を祝う

船出して金波銀波の春の海

かおり幼稚園増築落成を祝う

増築へ常盤の松も春の彩

松葉杖善意の瞳こぼれそう

花曇り花の心に背を向ける

呉市 榎田英詩

花の宴花のいのちも知らず飲み

足跡が消したい波が来てくれず

野心家にマイホーム主義の頼りなし

自己嫌悪妥協にそっぽ向いたまま

兵庫県 大江秋月

駅員さん娘のお尻の方を押し

姫路城ホームで見える駅楽し

顔ぶれがよすぎて座長決めかねる

切手さかさに大分あわてて出したらし

大阪市 金井文秋

スモッグもよし故里は大都会  
嫌な仕事は齡を云うて逃げ

聰明で美人でそれで売れ残り  
商売のルール破った奴が勝ち

大阪市 宮尾 あいき

みの虫よどけどけ桜が咲き初める

増えた白髪が妻を落ち付かせ

花散らす雨へ文珠の智恵も出ず(文珠院)

聖林寺の歴史をしのぶうば桜(聖林寺)

大阪市 小出 智子

ガリバーのように文鳥手に乗り足に乗り

鍵善ののれんくぐらす祇園の雨

紫が好きで紫を身に付けず

栄光の涙も笑いの渦に消え(漫才大賞表彰式)

大阪市 河野 君子

ふところのほつれ縫うまで浮かれまい

心の芽探して四月に立ち向う

夜桜を抜け出て幻想から覚める

シヨックさえ乱さぬ老女が非情とも

桜井市 岩本雀踊子

つながりを残す女のコびとなる

空間をうめる女の飾る嘘

生きて行く強さは昨日へふり向かず

手のひらのくぼみにうけるはした金

島根県 中島 英子

新築の校舎へとまどう参観日

どん底の暮しはげます芙美子の詩

雪を着た姿が招く孫三瓶

いくつかのロマンスを聞く花見莫塵

堺市 高橋 千万里

御好意のつぼみへ缺ためらわず

新緑に敗けまいとする口笛を

襟足よりひざぼしほめる世の移り

噴水の頂点みつめて爪かじる

神戸市 仲 どんたく

とは云えどこの不景気を営業部

花も木もアクロバットの華道展

京の雨花は今宵を限りとし

写真の僕を孫が見つけた見つけた

鳥取県 鈴木村 諷子

海底に住む魚さえも偶数で

少年一つ一つ社会のクイズ解いてゆく

強いられた沈黙女私語となる

トイレからいっそのまま消えようか

香川県 三井 酔夢

京都散策

いもぼうにGパンの娘らのかしませ

夜景にも厭きて叡山月を待つ

うぐいすと椿一りん虚子の墓

肩あげをとる日も近い京なまり

八尾市 高杉鬼遊

パチンコへ父は家から追い出され

支離滅裂蛍光灯が疲れ果て

一粒の善意砂漠へ埋められ

勤めねばならぬ桜を通り抜け

愛媛県 渡辺曉童

民芸調でいつも空腹

素直にすぎて張り合いを欠き

秘めてる虫はすぐおこる虫

年取りようも千差万別

笠岡市 松本忠三

グリーン車の位置とも知らず列車待ち

気をつけるただそれだけの父の愛

新聞を読むのが嫌になる世相

酒となり人間の裏表

西宮市 島居百酒

新入社飲める奴から覚えられ

大物と同道それなりにもてなされ

一と言が多くてことをぶち毀し

誤魔化しの道具に利用された地位

大阪市 河井庸佑

D51が煙を出してポーズとる

通勤車いつものどこにいつもの娘

無いことはないがとぬけ道におわせる

立場上言うてるだけと聞き分ける

守口市 村田瓢太

ひかり西へ記念切手へ並ぶ列

退院の試歩へ肩貸す妻がおり

余命知りやたら善根蒔きたがり

飲む・食う・吸うどれも汚ればなしなり

大阪市 水谷竹荘

別居してから裁判所だけで逢い

法善寺不動の水も枯れて来る

周遊の旅で浮気のみまもなし

番号で呼出しうける控室

八尾市 飯田悦郎

清掃車美しい街にする歌流す

暗転に電気毛布が温らず

送電塔たてて小島に灯りなし

途中下車を消さねばならぬ化粧する

大阪市 室谷徹舟

母と娘のセックス論へ遠慮する

降らんでも降っても困る雪に泣く  
民宿で夢に見る程カニを食ひ  
就職を告げるかしわ手強く打つ

富田林市 浅川八郎

招いてる弥陀の慈眼はほんとかな  
禁酒三日禁酒宣言に腹が立ち

伊豆の湯へ

芦の湖よ霧の中で何さびしい  
伊豆の湯に神経痛を委そうか

生駒市 草深醉升

金儲け奥の院まで来てたのみ

時は金なり十五分おきに鳴る時計  
土砂降りへピシャリとバスは閉めて逃げ  
控所に二号待たせて墓参り

鳥取県 清水一保

立ち替り続く祝辞を耐えに耐え  
握手した手ヘライバルを意識する

ピニールで育ったように見る背丈  
温まる記事を求めて見る紙面

大阪市 児島与呂志

働いて働いて母老い給い小そうなり

新婚のふたりを送る阿呆らしさ

純情な男照れてる席立てず

噂にもなっておんなの耐えつづけ

岡山市 川端柳子

拝む富士観る富士足だけがす富士

栄光の涙はレモンの香を残し

可能性夢でなさそう夕焼ける

家政婦に通いましょうかと神戸から(新幹線岡山へ開通)

島根県 小砂白汀

笛吹いて踊るはわたしの影ばかり

善人の背に十字架くくられる

有刺鉄線おのが影にもおびえ

焚口へ集まる風はバックせず

愛媛県 村上旭童

故里へ帰った心地海が見え

その野次のうまさに或日たすけられ

どっちから吹いても春の匂う風

そのうえに花も咲いてる忙しさ

尼崎県 高津徹也

世界を語らいや身近なことがぬけている

反応を示さぬ人で椅子をやり

社長殿悪いがシンボルの他でなし

夕日映ゆ太陽と俺の距離

大田市 藤田軒太楼

春あらし不況に追打ちかけて去に

橋渡し済めば刺身のつまにされ  
不合格の家へは暫く遠去かり

移植した若木主の愛に燃え

大阪市 今西章雅

同文の中国略字が違い過ぎ

無視された不満が消えぬ頭越し

同窓会へ缺席と出す胃潰瘍

一日三回これ屯服と医者かくれ

倉敷市 谷井扇水

合格をして一流の名に疲れ

お天気を褒めて焼香の順を待ち

コネと云う血筋の中でうろたえず

独走が怖くて拍手がおくれぬ

宇部市 平田実男

倅の花はほっといては咲かず

カタログの通りは値段だけだった

義理で来た手伝い時計ばかり見る

甥結婚

あのおまえ坊が大人の顔になり

鳥取県 森田布堂

満開の花見の留守に火事を出し

参禅のものしり足が痛みだし

同権の自覚浮気も負けられず

ジャングルの穴を見たさに羽田発ち

広島県 高橋鬼焼

行詰る話をすくう電話ベル

空想の視野に小さなアドバルン

人形へ涙を見せて一人ぼち

母だけのくせへ素直な下駄のちび

松江市 小林孤呂二

精一杯の笑顔で一日暮れにけり

言い足りて回転椅子の素直なり

努力した成歩のこころ省みる

骨董屋百年の嘘を云つてのけ

松江市 恒松町紅

贅沢な悩み財産取得税

お隣りへ駐車が出来る土地を買い

出雲弁で尋ねタクシー戸惑わせ

ただ一人歩くに惜しい渡月橋

笠岡市 木山遠二

法律が殖え住み難い国となり

金言が若者たちに嗤われる

身辺多難

偽を許せぬ心夜を徹す

憎むより憎まぬことの難かしさ

鳥取県 川崎秋女

娘がいたらあつたらと思ふ雛の市  
鯛焼の温みへ遠い亡母想う

人ひとり呑んで春浪荒れ狂う

這い上るしあわせが未だあるわがくらし

新宮市 大矢十郎

空白の日日朝焼けが追いたてる

息子ひとり増えると思ひ嫁ると決め

メーデーの目に羨まれ蔑すまれ

亡き母にひと目と思ふ角かくし

富田林市 木村弥栄子

添え花を変えれば松の緑映え

芸に身を托して女愛を断ち

とじ込める策なし愛に鍵がない

味気なさ二本レールの幅に生き

島根県 藤井明朗

よしやろう酒のせいではすまされず

言う事は言うて非協力へ廻り

握手とは別に商戦探り合い

伊丹市 小川静観堂

桜散るや诗情は湧いてもまとまらず

春暁の玻璃戸へ庭樹の影うつす

ものを書く机へまともにジェット飛ぶ

姫路市 隠岐不酔

花だより早よう咲いて遅う散り

俺にでもあるぞ今年は誕生日(二月二十九日出生)

慰めの言葉皮肉にとる左遷

出雲市 原 独仙

萬物が息吹く陽気を病む不運

肚割って話して呉れた酒となり

離職して空洞の日々味気なく

大阪市 福井野迷路

空想が架空に不落の城つくる

振り向かぬ主義を破つたよい衣裳

得意には淡然 失意には泰然自若たり

岡山県 池田古心

天地交ガマ微動せぬ構え

モーターで盗られ届出も出来ず

口に出す恐さ仏となる日まで

和泉市 西岡洛醉

一億円脱税雲の上の記事

美人薄命縁遠い妻と添うて無事

不平不満連れ添うから聞いてくれ

東大阪市 竹中肖二

春日遅々寝ころんでみるプロ野球

プロレスの男の性よ朱に染み

本名は知らず繭子で覚えられ

東大阪市

竹中綾女

白足袋の動きに見入る能舞台

謡い声揃って春の昼のどか

能舞台静と動とに有る調和

東大阪市

宮西弥生

終い風呂ぎりぎりに来て派手に脱ぎ

歯ざしりを噛んで世間を渡る知恵

畳いっぱいへ儲からない内職

大阪市

飛田好一

聞かずとも語るに落ちて嘘がばれ

酒と云う弱い男にある逃げ場

老妻の声若やいで旅にいる

堺市

伏見茂美

見はるかす伊勢の田造り清々し(伊勢路にて)

娘と遊ぶ鳥羽は春雨伊良湖また

うなぎだけ食べに浜松下りて雨

姫路市

村上春巳

だんだんに話せば戦友だった宿

取つときの愛嬌鬼さん花会式

山の辺に春が来た来た童唄

松江市

岡崎祥月

変身も出来ず時世に負けておく

政治不信人間腐敗自己批判

我田引水ふるさとのよさほめておく

倉敷市

藤井春日

毒舌へ怒りを見せた愚を悟り

肩組んで歩もう道の果てるまで

手にグラス心の霧の晴れるまで

高槻市

山田季賛

一対一で話せばわかる事であり

酒ビールに好み有るとはぜいたくな

酔うていても自分だけは信じ

小松市

馬場魚山

梯子車の予算も増やすビルラッシュ

お玩具屋はヒナから武者ヘジャンプする

買ってやる義理へ買っても呉れる義理

兵庫県

河原みのる

ローン月賦借金のうちに入れとらざる

べき時に来て降っておけ冬雪

丹波開発

ゴルフ場になるそな山の皮をむき

堺市

藤井一二三

愛想笑いも言えて二代目やつと継ぎ

偽医でも良し救急を待つ夜更け

親の夢背で揺れてるランドセル

下関市 志賀木石

ころろ平なる日なり鮑丁研ぎ澄ます

己が城枕にさざえ焼かれけり

カサコンと生きております老夫婦

東大阪市 齊藤三十四

桜吹雪白鳥しっかり食べて行け

ナツメロを嫁と一緒にハミングし

鮮血がカラーテレビから吹き出でる

島根県 大森孝華

過疎の灯を消すまい若葉春を酌み

とんねるを抜けて姿勢は崩すまい

永遠契る肌いそいと春へ崩え

★ 菊沢小松園

男と女の歴史へ風は血の匂い

夜が更けて指は口より雄弁な

抵抗のない唇の味気なく

出る杭は打たれる今更泣くもんか

都会とは鏡に歪む顔を持ち

川村好郎

外は春心の喪章をもちはず

久し振り記憶をたどる声になり

道連れじゃないか和をくずすまい

いろいろのマスクはずして今日終る

双方の云い分聞いて酒に変え

若本多久志

去りし友へ

金貸したばかりに友が一人消え

入社式

突っかかってくる若者へファイト湧く

時事雑吟(二句)

知らしめずなる程昭和元禄か

人間だった首相やっぱりキバをむき

晴耕雨読俺の老後にそれは無し

北川春巢

幸福になりたい愚痴をこぼし合い

背延びする暮しへ瘡せたなといわれ

平服でご来臨をも刷りこませ

医学会出席(於名古屋四七・四)

学会の日取り花前線と合い

学会場公会堂で花も見え

西尾栗

この島に残る方言雅びなる

酔いしれて肩よせ合うて島に住み

住みなれて島には島のにぎり酒

この島は身内婚とか紅椿

瀬戸内の島出身とききしのみ

# 川傍柳 初篇研究

(百七)

前田喜代人 川端柳風  
 故  
 岡崎重義 高須啞三味  
 清博美 丸十府  
 藤井和雄 岡田甫

638 花の雨民家へ琴をかつき込

五 雀

前田||奥方・姫君等が参加の御殿女中たちの花見は、琴まで持参の大変なものであった。そのうちに雨が降り出したので、付近の民家に琴をかつきこんだというので、民家というのからして、ござ等の商売につながる琴ではないと思つた。

お花見のすむうち空へ手を当てる 四・21  
 清||贊。

花の雨琴慎莫におへぬなり 二一・28  
 など、花と雨の類句はかなりある。

藤井||大家の琴だけに貴重品。何はともあれ近くの民家へ始末にこまる琴をかつき込んだのも無理はない。

高須||「花の雨」には、こういう景は種々あったであらう。

丸・岡田||諸説贊。

639 元服を女はちびりくする

一 甫

前田||既に出た半元服の句。元服はお齒黒をつけ眉を落とすのであるが、お齒黒だけの半元服をし、主として結婚妊娠してから本元服の眉を落とす場合もあった。「ちびりちびりする」でこれを表現したにすぎない。

高須||贊。「齒を染める」半元服から「眉を落とす」本元服まで、女性は一時に元服しないことを詠んだ句である。

丸・岡田||贊。  
 640 月落鳥啼て女房はらを立

梅 斧

前田||「月落ち鳥啼いて」は寒山寺の詩。

「月落鳥啼霜滿天云々」の文句取。夜中から朝になるうというかわりである。亭主が外泊(吉原など)したので、夜明けまで待

つた女房が腹を立てたとの意である。平凡月落ち鳥啼いて四つ手又盛り 傍三・33  
 清||文句取りだけの句。

藤井||張継のは「楓椿花泊」の詩。女房は「吉原夜泊」に腹を立てた。

高須||朝となって女房の腹が立ってきたというのが、それまで「今か今か」と待っていた気持ちで、あえて平凡とはいきれぬものがある気がする。

丸||贊。高須説のように文句取りとしてはよく感情がこもって佳句。

岡田||同。漢学流行の當時の作としては、文句取りも感動している。

641 家内出て月夜に花を拾ふ也  
 五 鳥

前田||わからないが、あえて解したのは、(一)歌心のある妻女が、屋外に出て月夜のよい風情にふれて、花の歌(句)をつくった

(二)家内が出たので、吉原に遊び紋日の月見と夜桜を得ることができた。

女房の腹月に立ち花に立ち

拾七・10

苦の世界女郎買ひにも月や花

一三・18

花にめで月にうかれておん出され一〇・23

藤井||家内出ては家内の者総出で、月夜は

十五夜の紋日、花はその時のチップ、花代

と解すれば後は説明の要なし。

惣花に生きとし生ける物が出る 傍一・1

と我々勉強の第一句があったはず。

川端||贊。

残りなく皆出ましよう遣手ふれ

二〇・20

高須||藤井説贊。「月夜に花を拾う」とは

凝った表現をしたものだ。生きとし生ける

者の中に家内(内儀)まで入れてしまった

句である。

丸||藤井説のように「家内」は家内じゅう

の意。

岡田||同。

642 しやうぞくを取ると水のミ式人出来

梅 斧

前田||「しやうぞく」は装束の略。「装

束」といへるは稲荷の祠より北へ四五丁隔

りて田の中にあり、是なん歳のつごもりに

狐ども寄合て狐火を焚くとき装束を改ると

いつたえる故なり、云々」と「反古のう

らぎき」にある。王子にあった榎。「絵本

江戸土産」を見ると、主としてアベック単

位にいろいろと服装をかえている。この句

「水のみ」であるから、百姓姿のアベック

が出来たことをいったのではなからうか。

岡崎||狐の化けぶりだろうが、「水のみ」

がわからない。

藤井||日雇い人夫の百姓二人、行列すんだ

美々しい装束をぬぎもとの百姓二人にもど

ったと、簡単に解してみたが。「水のみ二

人」の「二人」が何か意味があるのだから

う。礎稿通りの装束で大晦日の夜、狐が

集って衣装改めとは「化けくらべ」とする

のだろうか、すると「化けコンクール」に

百姓二人になったという意味か。

川端||祭りの仮装ではないかと思つたが、

わからない。

高須||三河才に出た二人。正月がすんで

村へ帰って装束をとれば、ただ二人の水呑

み百姓だという句であろうと思う。「水の

み二人」がキツイが、江戸人から見れば百

姓はみなそう思えたのであろう。

丸・岡田||高須説の通り。

643 渋紙の袋羅漢の脇に置

前田・岡崎||わからない。

清||芝居において舞台の下手寄の処にある

座席が羅漢台。「川柳江戸歌舞伎」には主

題句に対して「握り飯を入れる袋かと思へ

ど只推解にすぎぬ」と訳されている。いず

れ芝居見物客の持って来た袋であろうが、

中に何が入れられていたかは不詳。

藤井||前田氏が羅漢を「羅漢」の誤りを記

すのを羅漢の誤と又誤つたのでわからなく

なった。羅漢はうす絹とあやおりの高価な

織物で、渋紙の袋の中に常に大切にに入れて

あるのを虫干しで出して、その脇に置いて

あるのではあるまいか。

高須||藤井説の通り「羅漢(らりょう)」

は「うすぎぬとあやおりと」で柳雨翁は

「蕎麦粉の御土産など持参した太夫の実

父」と解かれた。然らんが実父とまでいわ

ず、古里の縁者ぐらいでよくはないか。

丸||藤井説のように渋紙の畳紙を袋といっ

たのであろう。

岡田||渋紙の畳紙(たたみがみ)は、遊女

ならベッコウ製の櫛・カンザシを入れたも

の。これから盛装をする太夫級のオイラン

あたりか。禿がそれらを出して運んでくる

状態とも解されよう。(但し、異見が出て

単 弓

来そうな句。)

# 柳樽休刊異聞

東野大八

柳誌でありながら毎月毎月川柳そっちのけのアホなことばかり書いてるので、少々気がひけるまま、今月は川柳のことをお書きいたしましょう。

川柳といつても柳論は、初夏の汗ばむころおいなればいささかヤボ。そこで風呂上りの浴衣がけムードで江戸川柳といこう。江戸川柳といえば柳樽。ピン詰より酒はタル酒。

さて、ウルウ年のおかげで、今年には日曜祭日がただの一辺もダブらない。勤め人には天好(テンハオ)の甲つてところだ。だからわっちも駄文をひねるにはもつてこいの余慶ありといわねなで、休みにちなんぞ柳樽休刊をせついで口取り代りといたしましょう。

ところで口取り代りの柳樽だが、この樽が開店休業したのは、柄井先生ご逝去の年の寛政二年(一七九〇)をはさんで三十篇までの文化元年(一八〇三)にかけ九回ある。先生御他界の年以前は天明七年だけで、そのあとは寛政二年の年をはじめ、同四年五年とつづ

きあとは同七年と九年。年号かわって享保元年からなんと三年つづきの休刊である。

柳樽は記録によればしめて百六十六篇。まさに江戸期を七十二年間もベストセラーを続けながら、なぜ初手の九年と天保九年以後は息の根を止めたのであらうか。その元兇は松平定信にある。日本最初の出版弾圧法、つまり発禁部門で、軟派関連の禁令も徹底的に断行したのが他ならぬこのご仁なのである。

印刷販売される発禁事件がわが国で最初に登場したのは法的に申せば享保七年(一七二二)に出された瓦版禁令がそれ。当時は出版でなく「板」の方だったがこの出版禁令第一号につづいて、好色本に関する禁令、寛政異学の禁令、版木屋仲間への禁令、一枚絵板木令などぞくぞく追い打ちをかけてきたのが松平内閣であったわけだ。このため、安永・天明期などのころには、江戸の文筆人や浮世絵師、板元で禁令にひっかからなかった者は一人もいなかったと記録にある。もっとも、こ

の禁令は初手江戸中心にみた場合で、江戸に較べると上方の京、大坂辺は治外法権的自由圏を構成していた。ところが今と昔のちがうところだ。爛熟放逸な上方町人文化が、江戸に流れ込んできたとき、江戸の禁令は来る一方から締めあげに出たという形だ。松平内閣の施政方針は田村意次・意知の賄賂政治の腐敗・放縱の世相の体質を根底から払拭しようという徹底肅正改革を目指していたのだから、田村施政で首まどトルコ風呂に入っていた連中が、いきなり木枯しの吹く原っぱにはうり出されたような形になった。狂歌・川柳・洒落本なども勿論その場合、例外どころではない。

発禁の元祖を成した幕閣の定信総理は、將軍吉宗の子田安宗武の七男で、母は関白家久の娘。父吉宗はわが子宗武が利発な子であるところから跡目の將軍にと考えたほどだが、結局その兄の家重が將軍職に就いた。こんな家柄だから定信は名門中の名門である。定信は十歳で後漢書や論語を読みこなし了秀才で、十六歳で松平定邦の養子になり、十九歳で定邦の娘と結婚したが、妻に対し初夜の翌朝一巻を贈った。

「女の心得をいって一巻を贈る。このこと理にのみはせて、いわば腐儒の常談、人情に遠きことのみなりき」

と彼は語っており、一首を添えている。

一つましき新手柄の思いをば、妹背の道  
を長く忘るな  
初心忘るべからずも結構だが、どうも話の

筋が固すぎる。完全童貞の初婚男の悪い癖だ。こんな人柄だから定信どのを川柳の柳にくらべれば、夏の蘇鉄でも眺めるような感じになる。

安永元年、田沼意次が老中となり、息子意知が若年寄となったころおい、天下は天明大饑饉を中心に、浅間山の噴火、悪疫の流行、百姓一揆の続発、米価暴騰、財政のひっ迫などが相次ぎ、天下の怨念は田村親子に集中した形だが、その意知が天明四年三月二十四日初動番左野善左衛門に斬られて三日後に死んだ。世にいう正直し大明神といわれたのがこの善左衛門である。意知の葬式は四月十二日だったが、寺の駒込勝林寺は乞食町人が群がり投石しきりで、葬式が終ったのが夜になったという。江戸市民は大いにわいて落首の傑作が巷にとび交い、黄表紙、浮世絵はこれみよがしに田沼親子に対し諷刺の限りをつくしたりとある。板元はこの市中の諷刺をあてこみ趣好の限りをつらねて売りまくった。

斬られたのは、ばが年寄と聞くとわや

山もお城も騒ぐ新番

—金とりて田沼る、身の憎くさ故

命捨てても佐野身惜しまん

こうした世評の中の最高傑作は、山東京伝の『時代世話二挺鼓』と歌麿門人行曆のその風刺画であったという。

こうした世情や、田沼意次の賄賂政治を溜間みていたのが松平定信である。準幕閣参与のこの定信の存在を見落していたのが意次生涯の不覚となるのである。意次の悪政は天

下に聞え、幕中にも折あらばの気運が頂点に達してただけに、定信の田沼弾核は手応え十分。かくて定信内閣が上げ潮に乗る。

定信老中となるも時に三十歳。將軍家斎はわずか十五歳である。明徹英達の若き定信の新政がさうあたりを払う態となる。

田沼の悪政を一新し、享保の遺制に則り、官紀を振粛し、吏僚を奨励せしめ、世情を刷新するという施政方針も結構だが、風俗矯正の点は微に入り細にわたって町民たちの下帯にまで届くところまでできた。寛政二年五月付の町触れがその第一発である。全文ここに書きたいところだが紙幅がない。要するに一種の出版(版)条令なのである。

要約するならば禁制の第一は時事画報の類。第二は当局の認めるもののはかの新規著作の類。第三は好色本。第四は異説、浮説の類もしくは諷刺におよぶもの。同じ町触れの別な禁例に異字禁制が出ており、これは林子平の『海国兵談』がヤリ玉に挙げた。

続いて第三弾は江戸三奉行あての厳重執行の督促。第三弾は寛政五年八月出た板木屋仲間への影り立ての儀と題するおふれ書。これは出版物は登録の板木屋以外で作る者は厳罰に処す、よってその方たちで今でいう「組合」組織を作ってもぐりを一切閉め出せというもの。これは当節の組合組織のハシリだから。合わせて世間のウワサ、火事、盗賊の一枚刷りを一切出すべからず、とのきついお達し、これが戦時中の言論統制、新聞検閲の先例を作ったわけだ。

このおふれ書にふれた刑罰の第一号が山東京伝で、おふれ書が出ると同時ぐらいに検挙された。手鎖五十日軽追放、版元萬屋重三郎は身代半減、關所の処分をうけた。このようにして検問にかかり体刑処分をうけた主なる連中は、京伝をはじめ平賀源内、式亭三馬、柳亭種彦、立川春町、西川祐信、喜多川歌麿、歌川豊国、為永春水などがいる。この中で刑死したのに平賀源内と為永春水で、春水は手鎖で水腫を患って死んだが時に天保十四年である。筆者はこの春水の死期を憶うにつれ天保十年に百六十六篇をもって永久休刊に踏み切った柳樽の在り様に想いを致すのが常である。網の目のような幕府の封建的抑圧体系の中で、心の自由を奔放に自分なりに限定しながら徹底的にやり抜いた努力を、時の川柳人はじめ、黄表紙、洒落本の作者たちや、絵師たちの姿に、誰しも限らない愛惜の情を捧ぐるのであろう。もしヤボ天の定信が、今少し角のとれた人間なら、江戸文学はのちの世まで燎原の火の如くに燃えさかっただであらう。柳樽の場合はその数千巻を越し、末摘花も百花を競ったであろう。時よ時節で、町民文化ほどその栄枯の二面をいみじくもその身につけるものはないと思うわけである。松平定信の強度な緊縮節儉政策は、世情を無味乾燥なものとし、拘束甚だしい政経の体質によって不景気の風は年を遂って深まった。庶民はつきように陰ながらの諷刺を放った。

—白河の清きに魚も棲みかねて  
もとの濁りの田沼恋しき

# 探柳への出発

戸田古方

を感じているのです。

この僅かな期間の実験でやっといえることは季語ということ。最初に取上げた

「落ち椿へ鼻すり寄せている仔鹿」

の句を俳句へ東道して下さった俳友にみせたところ、「落ち椿」より、「春ぬくし」とか季語を変えた方がよりよくなりはしないかといわれました。

満ち潮のように心にあふれてきた詩想の出鼻をくじくような作用をするものが「季語」でないかと柳人古方は思います。

川柳ならば何のこだわりもなく、思ったことをずばり、正直にそのまま口に出せば句になるのに、季語という厄介なものをその都度取り入れなければならぬのは何としても、しんどいことで、時にははらだたく、苦しくさえなります。

俳人の中には季語があるから、俳句は楽なんだという人もあります。冠句か、附け句のように何をつけても、いい俳句になるとは限りませんが、俳句って大へんだなあと思っています。

俳人はことばに細心の注意をして、「ここに遣われる語は天下に一語よりない」ということを地で行くような精進をしています。川柳とても同じことがいえますが、これには私も頭がさがる思いがします。

昭和四十五年の夏以来、ご縁があつて俳句の雲座に坐つてみることになりました。名前も古方のままです。柳・俳両刀を使うのかといわれもしていますが、私は俳句を楽しむという事より、学びたいのです。というのは他を知ることによって、川柳とは何かということをも身を以て知りたかつたからです。

この夏で満二年、柳友の中にも可成りな俳人のいられることも敢て意とせず、この実験——川柳がどこまで俳句と通ずるものを持つか、この実験のとはしい成果ではありませんが第一回の報告をさして頂こうと思ひます。

落ち椿へ鼻すり寄せている仔鹿

三月でしたか、この句が雲座だけでなく、俳師の選の末に拾い上げられました。この句は昭和四十二年南大阪川柳会で奈良へいった時の句で、一字も改めずに出しました。

二月に俳友と南紀へ梅見にまいりました。オリオンがはっきり真上二月間

十日ほどずれましたなと梅探る

取り上げられたこの二句を俳友の一人は「川柳調できて、季語できゅつと締くつてある」といつてくれました。

この正月の前後、次の二句を得ています。

いただいたいのちのちのちのちを越す

いただきしいのちたふとし年移る

もう一つ

燦然と一期一会に畏まる

燦然と一期一会の初日かな

二つずつ並べた最初が川柳塔誌の川柳塔に選ばれた句です。あとの方は俳句、季語を入れてあります。「年を越す」という季語がみつからなかつたので「年移す」と改めたのですが、発表された句には「いのちのちのちのちのちのちたふとし」と添作されてありました。何故「ままで」ではいけないのか、その理由をまだ聞いていませんが、柳人古方には何だか夢の中で走っているようなもどかしさ

日本は四季のけじめのはっきりした国です  
から、その自然諷詠に季節を象徴するもの  
とり入れることは日本人の詩として、頭  
から不賛成だとは思いません。川柳の場  
合はむしろ、そうした季語らしいもの  
が、入らず、そうした季語らしいもの  
が、入る場合もありますし、入って  
いない場合もあります。

俳句は禪宗のような厳しさをも  
っている、川柳は親鸞の教のように慈悲に包  
まれて、そのままで救われている安らかさを  
覚えるのです。

俳人の中には川柳を今だに誤解して  
いる人も少なくありません。川柳のあの穿  
ちはとて手にも負えぬ、酸いも甘いも  
噛み分けられないと作れぬとおじけ  
ている人にも逢いました。

それから、俳句では、字余り、字  
足らずにも厳しいのです。初心とい  
うか、入門の始めのように、そ  
おと指を折って十七字になるか  
どうかを確かめたりします。川柳、こ  
に路郎先生に十七音字と教えた  
だいたことが、いまさらのように嬉  
しく、有難く思われてならない  
のです。

私のこうした試み、俳句を踏み  
台にしかねない私の本心を明かす  
と俳句の人達に悪く、すまない  
ような気がします。私はあくまで  
俳句へ留学させてもらっている  
のです。しかし歌壇や俳壇が堂々  
胸を張っているのに柳壇が

そこまでいっていないのを私は淋しく思  
っている一人です。川柳人口も殖えて  
はきていますと申せ、まだまだのよう  
にも思えます。

俳句することによって、川柳にも  
柳壇がある、川柳でなければならぬ  
ものとはどんなのかを、もっとも  
っと知りたと思います。

ひとさまの句をお借りすればも  
っと、いいたいことがいえるかも  
しれません。まだほんの二年生  
です。今回は自分の作品だけで  
実験報告をいたした次第です。

数カ月前、多久志さんが、川柳  
十句、俳句十句を並べて、ど  
れが俳句で、どれが川柳か  
いい当てられるかという  
ようなことから、川柳の本質  
についての反省やら、希望  
やら、願いを話になりました。  
私はこれにも大きな

## 一分間の柳論

### 川柳五カ条

- 一、作品はあくまでも川柳の三要素を基礎としたものでなくてはならない（この枠をはみ出たものは絶対に川柳ではない）
- 一、作品は読む人々を楽しませ、人々の生活にプラスするものでなくてはならない
- 一、作品は他人のもの真似でなく、句主自身の発見であり創作でなくてはならない
- 一、作品は人々の高度にして強烈な共感を

刺激を受けました。

路郎先生から、輪違いの重っているところ、一つの輪は川柳、もう一つの輪は俳句、その重っている所に位置する句は川柳人が作れば川柳、俳人が作れば俳句というような話を伺ったことがあります。

今日は私自身で、その輪違いの重っている部分を実験したわけでした。しかし、私の願いは、重っていない部分、どうもっていけば川柳と俳句が一つになるか、ならぬか、そんなことはとても問題になるか、ならぬか、それをめざして精進してみたいと思っています。

— 四七・四・一五 —

## 直原七面山

呼ぶものでなくてはならない。

- 一、作品は句意が完全に一般大衆に理解されうるものでなくてはならない。（こうした句が名句として、いのちある句として永久に人々の心の中に残ってゆく）
- 以上の川柳五カ条を旨とし、名句は高い人格と、知性と、そして豊富な知識から生れ出づることを知り、作句にいのちを燃しつづけること。これが七面山のミニ川柳論。

「旅人」以後の

# 麻生路郎作品

17

三十五年六月号

不朽洞句帖

雲の上にいる気か首相耳かさず

人間を忘れ戦術だけに生き

選挙以外庶民は化石扱いか

上京はしても首相の顔も見ず

八十八もう槍さびも唄わない

天外の笑いの中に自分を

よくきたころを知ってる女将なり

老い込んだ先輩二級飲むという

飲むとこでさえもきかない顔になり

墓に彫る字まで気にして死んでゆく

どっちみち亡びる国サストで死に

嫁き遅れ自分で云える年になり

大阪通信病院川柳会「スリル」

灯を消した隣の部屋もスリルなり

少女のスリル推理小説一二冊

三十五年七月号

不朽洞句帖

不幸にも気も狂わずに首相いる

私邸まで鉄条網は哀れなり

薄のろであつてもデモの一人なり

デモとストの日本

天皇はつんば機敷でみそなわし

お互いは日本を売ったことになり

ジャングルのない日本をさみしがり

鏡 百合 たれも来ず

妻よ踊れ残こんの色香ほのぼのと

お互いにアクセサリーの老夫婦

ダブルベッドを求むひろびろと寐たいばかりに

本社六月句会「温顔」

温顔で今のは誰やと嫁へきき

大阪通信病院句会「血色」

血色かどうのこうのと散ってゆく

南海電鉄川柳会「社内誌」

社内誌で見れば社長も二段うて

四月号訂正—ランナーになったかきみの姿なし

—27P下段二行目

(傍 島 静 馬)

# 西宮から

堀口塊人

一三夫宛に

「拝啓」毎々川柳塔誌上で御健在の様子を拝し喜んでおります。

小生入院中には御見舞状拝受厚く御礼申し上げます。

その後、自宅で体力の回復につとめおりますが、今年中はかかるらしいです。当分失礼お許し下さい。

主幹の御外遊にて編集部は益々御多忙と存じます。

御健勝と御健吟をお祈り申し上げます。どつき漫才作者の心知りもせず 塊人

## 美濃加茂から

東野 大八

一三夫宛に

八月号の特集「終戦記念号」なら、むかし「將軍と参謀と兵」という映画がありましたね。そこで「川柳と將軍と兵」は如何ですか。——

木曾路の旅、仕事にはさまれていますが、十七日、十八日はちようどうまくあいております。

パリから

大坂 形水

一三夫・葉子宛に

昨日、今日とパリの街を見物。ぐったり疲れたところ。若い連中は元気。十時から始まる夜のパリを体験しに出かけて行った。パリは夜が値打ちとか、十時から三時過ぎまでと聞いて、残念ながらこれから先きが二週間余もある自分らには自重してホテルにいるよりほかない。パリの喫茶店はこの絵ハガキのように、椅子を街路にはみ出した美にのんびりした風景。コーヒーだけでも時間無制限に楽しめます。——皆さんよろしく。

## 近 詠

長野県 高峰 柳児

花吹雪表情変えぬ観世音  
惜し気なく文化生活ものを捨て  
ロングスカート仮装したように見え  
六畳へ一ぱい女の脱いだもの

岐阜市 市川 鱗魚

三面鏡だけが味方にパフ叩く  
役不足左遷に甘える肚が出来  
老駟もう孫の行動範囲に疲れ  
また聞きを信じる素直さ容られる

大洲市 米沢 暁明

意地張りの鯉とは見えぬ吹き流し  
頑張っているとは見えぬ京なまり  
ステテコの気さく家主の物分り  
正直の馬鹿職人の似た親子

今治市 長野 文庫

計算も手伝っているプロポーズ  
またおいで必ず来ます手のぬくみ  
三次会まことしやかな咳で逃げ  
先生を迎える荷物重くない

今治市 月原 宵明

影のような記者がうるさい時の人  
やる気なら半日ほどで済む仕事  
うれしさを隠せぬ時の喋り過ぎ

同人吟

# 秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

組合が値上げしよりましたと散髪屋

傍島静馬

一連のコマーシユリズムや、物価値上げ反對ムードの中で、この句意を東京弁で詠んだらどうなるだろう？、柔らかな上方言葉が、いかにもこの散髪屋さんの心情を訴えているように思う。

妻と居て何の不足か春の宵

堀江正朗

暗黒の世界に強く生きようと努力しておられる作者の日常を知る者として、一入この句が胸を刺す。

生命とりとなる酒ならん今日も酌む

市場没食子

わかっちゃいるけどやめられないのが酒と

煙草、それが又人間であることの証でもあって面白い。

燃えた日は言わず憎しみだけ残し

若柳潮花

お釈迦さまも、四苦八苦の中に怨憎会苦を説いておられるが、人間の宿業というものは何と浅ましいものであるうか。

くさり編みが続くよ夫婦の足の跡

河野君子

編みものの連想を、夫婦の宿縁とむすびつけた句の発想を高く評価したい。

春の陽が障子に雀画きに来る

鈴木村颯子

俳聖一茶の句風を偲ばすような作品、こうした作句が出来る境地を羨しく思う。

オートバイ十八才の音で来る

遠山可住

この句の生命は「十八才の音」にある。一註（運転免許の受験資格は満十六才から得られる）

落葉にも居心地のよい隅があり

若林草右

落葉の吹き溜りを風のせいにはしないのが詩

人の尊い観察力であり、英智とも言えよう。幸せな風かも知れず乗ってみる

野坂つき子

この句が女性の作品であるだけに、そのうまさを感じる。男性の冒し得ない境地であろう。

双肩の口ほどにない肩の中

奥谷弘朗

「一家五人の生活を双肩に担って……」と大言壮語を試みたものの、衰れなりや現実のこの姿、といった処、胸を打つ句。

自嘲して夫につくす性も愛

出原敬一

リアリストイックな句として感銘を覚える作品、人間の苦悩と宿命を深く考えさせる。

せち辛い地球と知らず土筆の芽

久家代仕男

せち辛い浮世とか現実とかという表現を排して、地球と土筆の芽を結びつけた手法は、さすがと敬服。

鑑賞を割愛した秀句

春宵や惚れた女の生ま返事

史好

焼わかめ春を呼んでる色になる

水客

しわがれた乳房も俺のせいにする

甲吉

炎えさせてあげたい女の思慕ゆれる 弥生

近作柳樽

# 秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

春愁の机上白紙のまま暮れ

三宅不朽

夕闇に響けまぼろしの宴なら

小谷葉子

過日某句会で所謂革新派作家と自負している方から、革新川柳は明日の川柳である。川柳塔の句は昨日の句で古いと批判を受け、私は川柳塔に対する警鐘とありがたく聴いた。しかし「近作柳樽」の中に古い殻を破った少くとも今日の川柳に向って前進している多くの句を発見した。ここにえらんだ二句の如きは詠み古された内容を新語難句で粉飾することなく、無理に新しがる付焼刃の句でなくよく感覚を表現し、古い頭の私でも躊躇なくチェックする句である。経験派作家であろうと、感覚派作家であろうと足踏みしてはならない。道は無限である。絶えざる前進の中に

新しい句を生み出すものと思う。

老人に用なきネオン美しく

阪上 十止庵

「ネオンまた男を誘う色で映え」という句もあった。この句は最近結婚された方方で、同じネオンを見ても、年輩の方とこれだけ違い面白く拝見した。老人には用なきネオンでもせめて美しいと感ずる境地は忘れてはならない。

法事より何着る着るで女もめ

岡本 まさひろ

遺族なら何を着ていようがそれよりも涙であろう。義理半分の他人の法事に列する心理をズバリと表現している。

ふり向けば小さな嘘に出合いそう

高杉 力

作者は二十代のこれからの青年である。それがこの句にも感ぜられ、鬼遊、干歩を両親にもつ作者は両親を乗り越えて、若さの横溢した脱伝統の句を創られることを祈る。

通夜の客どれも後姿なり

生信 笑子

勿論うしろ向きで通夜の席に坐っていると

いう姿を匂にしたのではなく、通夜の客の愁傷らしく坐っているが、内心ではそれだけでなく、それを後姿なりとうまい表現でこの句を生かしている。

模範囚のようにひっそり病んで

白石 潔

刑に服せば罪を漸愧し、本来の良心に立ちかえるものである。我執の強い人でも病床にながくあれば、自ずと人間の弱さを知り、ひとの情愛もわかってくるものである。「のように」という表現は余程突飛なものをもってこなければ説明句に終ってしまう。模範囚と病人とを比べさせたところが妙である。

四二歳分解掃除してみます

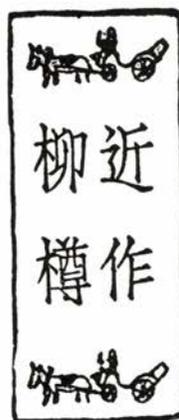
岩田 三和

四二歳に限らず肉体的にも精神的にも分解掃除が必要です。殊に四二歳は厄年とも謂われ、人生の第一期更年です。一生分解掃除を怠らぬように。ユーモアをさりげなく出してゐる句である。

風呂に入るときに心を解きはなす

脇 本政 己

ホンニそつだとうなずかせせる句である。身辺句にしても、掘り下げればいくらでも佳句が出てくるものである。



菊沢小松園選

大阪市 柳原 静香

見えぬ人のためにと花は香りもつ

それぞれの人生包む窓灯り

春の誘惑庭で食事を思いつき

有難うその一言で救われる

市場籠せめて花咲く道を選び

岡山県 嘉数 千代香

暗闇の中で時計のネジを巻く

汚れた金に人間が殺される

まっすぐに生きて過疎地の空が澄み

貧しさは云うまい夫も子も達者

世は移り変りて星座たしかなる

竹原市 脇本 政己

雑炊が好きな育ちをふりかえる

貨幣価値ともあれ満期がくる保険

つきあたるまでが歩行器おもしろい

国会中継また空しさが先にたち  
 冴返る心よ夜をもてあます

竹原市 三宅 不朽

父よ頑張れ回り舞台は僕が押す

鳥羽の春海女の声からやって来る

母と来し信濃の鐘よもつと鳴れ

四十坂あとふりむくなと樹々芽吹く

その中のもつとも美人の独身かな

大阪市 小谷 葉子

母に逢う一直線の道があり

ぬかるみに来て寄り添う人のいて

うばうもの奪われ微笑の女です

夢駈けるバースデーケーキの灯をとます

従兄農学博士号をとる

宇宙に羽搏け家系に彩をそえ

東京都 宮崎 美津子

もうよそ見出来ない老眼鏡のぞく仲

さざ波を抱き静かに川は果て

快心の活け花客は目もくれず

わけもなくうれしい子らの高笑い

松原市 近藤 一步

馴れ合いの芝居は楽屋裏でもめ

小走りに来て去る逢瀬それもよし

外国へ買われパテント名が挙がり

かけ出しも社長も今日はAランチ

大阪市 阪上 十止庵

ライターのいのちを削る火がきれい

もう一杯それがひと言多くさせ

首の座に坐ればだれもいない友

福耳ながら悲しいことをきくばかり

島根県 堀江 芳子

こころざし立てた荷が出る涙など

うたた寝へそっと託びたい悔を抱き

良心に恥じぬ姿勢で向い合い

その渦に巻かれてならぬ目を閉じる

豊橋市 浪翠 月

夢の中妻に言えない人に逢う

居寝むりの出来る身分の回り椅子

その昔ふられた人とふと出あい  
ランドセル親の希望を背負され

今治市 葛本 昌道

初老佗し落伍者五指にあり余り

好調と言われて壁に突き当たり

田舎まで大手が伸びて行く不況

肉ならぬ花の魅力となるヌード

八尾市 高杉 千歩

梨になる花の盛りに巡りあい

研修の娘に嫁の点つけてみる

再会を約した椿の寺を辞す

昨夜の雨そのままあやめ届けられ

竹原市 生信 笑子

貨物にも行き先がありおらが旅

誰もいないプラット・ホームのお月様

美しく語ろう満ちて来る潮よ

星空のしじまに女の子守歌

竹原市 簗田 浄美

日めくりの一枚毎に式間近か

小さな手大きな手わたしとあなた

口紅をいれて女が生きてくる

お祝いは何がいいのと来てくれる

守口市 岸本 豊平次

手内職終つてチューチューたこかいな  
撫でるのもぶつのも同じ掌で

吊り皮がぶらりぶらりと終電車

カーで来た花見桜を遠く見る

大阪市 小谷清女

舵取られたまんま古希にたどりつき

こう云えばこうなりそうで貝になり

逆ろうてむなしき口の渴き知る

日曜の朝寝に母も仲間入り

岡山県 武元柳子

ジャンケンに負けてかわいい鬼ができ

考えてみるとの返事に家を辞す

畑を打つ母にまつわるひもじい子

論語消え大学生が狂いだし

新宮市 川上富子

四国路ハネムーン

気がつけば二人きりの旅だった

お隣りも肩寄せ合っている気配

松並木身をくねらせたままにいる

交代で来てまたチップ出さされる

島根県 岩田三和

盗まれたワサビよ辛くなるでない

向う岸たしかめもせず橋をかけ

くずかごは読まずに焼いて親心  
礼一ついえぬ学生卒業す

大阪市 黒田真砂

桜散り花の溜息聞えそう

ウインドーに春の花あり歩を止める

巣立つ子の夢碎くなと祈る母

高知県 岡田星雨

四季のないくらしにさせてハウス病

テトロンから見れば木綿はまだ淑女

ぐっと来てポイと捨てます若さです

米子市 増田竹馬

毛せんを敷きも終えぬに花吹雪

婚前交渉丸々肥えて月足らず

追いつけ追い越せいつかアニマルになっていた

新宮市 川上久司

歩行者優先横断歩道走らさる

北九州修学旅行

なんとなく気が合いそうな猿も居り

余韻まだ握りしめてる紙テープ

東大阪市 藤田飛鳥

沈黙の中の瞳がふと怖い

残り火を搔きたて老いの恋燃やす

愛を編む心の糸を又つなぐ

羽曳野市 大 峠 可 動

限界があつて偽る鬼となる

明日へ飛ぶ心のバネよ強くあれ  
信じ合うよろこびと行く笑い声

尼崎市 中 谷 利 美

抱きしめて欲しい背中が泣きじゃくり

この鮮恋女房の成れの果て

チップ要る道理妻とは違う酌

鳥根県 谷 岡 芳 枝

マイホーム型あれも折れこれも折れ

ワンマンの妥協許さぬ目の光り

妥協した老眼鏡のくもり拭く

鳥根県 梶 み どり

この人と一本道を行く誓い

ありのまま暮らす心のあたたかみ

ふれるもの見るもの違う世にあえぐ

鳥根県 榊 原 秀 子

ふりむかず胸に菜の花摘み飾る

ピンカール娘と同じ夜の頭

流行を思いのままに選る若さ

鳥取県 林 露 杖

まだ若い若いと定年冷やかされ

稼がずに喰うことさほど楽でなし

アドレスをルージュで書いたマッチ箱

鋼路市 泉 きよし

不合格知ってギターを弾きはじめ

花のあることばに罫が埋められる

自負抱いてあわやもんどりうつところ

今治市 伊 藤 一 郎

入院もベテランとなる三とせ越し

交際を認めて呉れと居直られ

結構な趣旨に資金が集まらず

今治市 原 田 輝 親

男手で仏飯やつと盛り上げる

手をつけて御覧と誘う春の水

絵はがきで見ただけとなる日本の美

岩国市 村 井 西 合

しんそこはあなたに聞いてほしい愚痴

ほんとうの愛ほんとうの知恵を生み

家守る女に泳ぐ海がない

大阪市 堀 口 欣 一

都踊今日はあの妓の出番どす

鎌倉の土となる気で作家住む

自殺ではなかったらしい元女優

東大阪市 落 合 思 月

内幕を知ってて資金出しぶり

つまらないことにもベテラン呼び出され  
控え目のくせがぬけないむこ養子

守口市 野 呂 杜 月

生甲斐を見付けるまでの廻り道

懸命に登った山だが低かった

高価なる花瓶に花はちぢこまり

竹原市 楠 貞 子

悲涙吸う砂の無口を確める

素直さがないよと愛が逃げてゆく

信仰を素直に聞ける不倅

鳥取市 両 川 洋 々

包ませてからも女の気が変わり

馬鹿でない証拠こんな腹を立て

公害へ並木黙って枯れてみせ

和歌山市 島 本 泰 子

旅馴れて天気予報は軽くきく

四十才ピンクが似合う散歩道

信じよう肩のこりまでほぐれ出し

和歌山市 垂 井 千 寿 子

人気者人一倍の淋しがり

卒業後又逢いましょうとそれっきり

卒業の明くる日カツラ買いに行く

新潟市 市 川 一 峯

仏間より出るや凡夫に又返り

大空へ今日は巢立つか燕の子

なまくらの鉈は重みで切っており

大阪市 岡 本 まさひろ

花信より悲しや吉野の矢尻文字

水煙模糊額に入れて持って帰りたい

もう通ることない冬の過疎の道

今治市 渡 辺 南 奉

倅せをミニカの中に押し込める

さくら散る場所別れて恋終る

海風いで空洞うめる語を探す

河内長野市 井 上 喜 醉

ハネムーン心の帯がとけた朝

友情がじっと再起を待ってくれ

水平線夫婦のような空と海

呉市 佐 久 間 文 明

父と子の肩を並べて春の街

今日も又一日の歴史刻みはて

合格の電話にうれしい目の集い

新宮市 城 丹 鶴

税務署にほめられそんな申告書

めくら判ここへ捺しなと○印

金策へ当って碎けたいい度胸

和歌山県 ふきあげ 虎城

島の娘に汽笛うるさいときもあり

それぞれの花それぞれの色で咲き  
打たれても打たれても主張する釘

好かれても浮気の出来ぬ人であり

鳥取県 有田 鹿の子

カキ殻のつかない岩にある水位

夜桜へ今年も顔見せず

羽曳野市 戸水 慶子

明日は立つ子供の瞳が美しい

乱れ髪気にまるまでに癒え始め

大阪府 藤田 頂留子

親われる人で病床花に満ち

再会の言葉にならぬ手の温み

大阪府 竹内 一世

変りばえせぬなとつばめ飛び交うて

風向きが变りお説教される破目

傘さして名所の雨を嬉しがり  
鳥取県 大塚 豊生

いたわりへ老いの依估地が背を向ける

あと味の良さ真っ先に席譲り

大阪府 児玉 節子

春来れば母思い出す木の芽あえ  
宿毛市 山本 窓花

あの人だけには手製をあげることに決め

なま喃り法律冷たい事を云い

大阪府 児玉 節子

春来れば母思い出す木の芽あえ  
鳥取県 福田 陽山

花展へ出され落のとうかしこまり

神話聞き出雲の香り肌で知り

喧嘩せぬことも不安な一年目

いつまでも生きててほしい親であり

世話好きが家で一番手がかかり

今治市 大本 バット

青森県 波 ただお

春の潮雨情の歌碑の足許に

血液が混じり合うよな握手する

お団子の花見はあっけなく戻り

白足袋の裏さえ見せぬ慎ましさ

今治市 真山 国彦

岡山県 山田 止水

神様の授かりものが俺に似て

小商人自分の好きな物を置き

出勤のマダムと出逢う町外れ

風触れる時を信じて散る桜

松原市 玉置 重人

今治市 古野 伶人

山菜に敗戦直後想い出し

雨もものは入学式へ母和服

松山市 谷のぶお

産みますかと婦人科念を押し

前向きでいこうと齡に言い聞かせ

愛媛県 小笠原 仲美

年寄りの身にもけだるく春となる

病人に庭が日毎に春となる

和歌山市 樫村 ふみよ

爪切って足袋ぬいだまいる陽射し

訪れた人へ手乗りが首かしげ

寝屋川市 江口 度

逃げ道をこさえ上役吊し上げ

子の理屈親の小言とよい勝負

貝塚市 行天 千代

北海の旅あきらめて鈴蘭買う

気が付けばいたわられる年になっていた

氷見市 関 美子

お見舞は地玉子ラッシュを忘れてた

生きるとはかくもきびしきガン病棟

島根県 安達 潮音

過ちをまた繰返し棘をだく

青春の歩道歯止めは意に添わず

大和郡山市 森田 カズエ

看護婦の漫画みていた夜の詰所

ピノキオの童話せがんだ娘が嫁つき

大洲市 堀内 曉風

下駄はきも仲間に入れて草野球

コンペアの流れに人間酷使され

寝屋川市 福富 隆子

心して読んでる筈が読みなおす

老いの肌百円化粧で事たりる

仙台市 川村 映輝

賢母には遠いが子供がよくなつき

考えが妻と同じで今日も無事

高知県 岡田 星雨

伴れて来て月が明いのをこぼし

耕土改善うなぎも住めぬ川となり

鳥取県 佐々木 静泉

金婚の寿盃へしわ顔もほころびる

立人にも意外にあった落とし穴

七尾市 松高 秀峰

食道楽味覚の舌が邪魔になり

心配も程々にして酒になり

大東市 岡部 シゲ

のぞき見も出来ぬ古墳に人の群れ  
花に嵐例え通りに吹きまくり

池田市 石井文三郎

刺知らず薊の花に迷う蝶

割込んで臂の大きさを今わかり

島根県 錦織文子

「母は近く」

今逝った手のぬくもりをほほに抱く

思い出が欲しく看護婦さんに逢いにゆく

藤井寺市 古結百水

縁有ってなどと所詮は男女なり

月朧ろさくらへ妻は婉ならず

島根県 安達小茶坊

百科辞典に聞いてて太い鼻柱

名門に生まれオットリ型で老い

鳥取市 藤本恵子

暖冬へアクビ出そうなラッセル車

トタン屋根吾が家の音で降りつづき

鳥取市 藤本佳女

二で割れぬ理屈を裁判してもらい

たとえばの中に本心匂わせる

鳥取市 藤本和宏

寒さまた春の息吹を消しに来る

ガマ口のふくらみ程に持ってはず

鳥取市 藤本鎮也

加害者の誠意憎さが消えてゆき

友情はもうこれ切りの日記閉す

大阪市 稲葉星斗

童歌夕焼雲を追って行き

素足ではないぞとわざわざ柄を穿き

大阪市 河野幸子

いたわってくれたらくれたで気を使い

ユニホームだけはレギュラーと揃えにし

八尾市 今西寿子

気がつけば人生なかば肌の色

指先はニキビを大きく感じとり

愛媛県 渡辺都留逸

言うだけ無駄の盃を伏せ

星もスマイルもうぶな気やすめ

八尾市 古川鶴声

浅間荘鬼の化身の姿見る

備前市 武内雅堂

温まるとき胸の傷痛みだす

新潟県 高野不二

打ちあけずすんだ淋しさ今に知る

島根県 東原福子

ビル高く隣りの庭の陽をぬすみ

大阪市 平井露芳

口下手のあと一言を云いそびれ

羽咋市 三宅ろ亭

国益は国民の皆様知ってはず

大阪市 塩満敏

のめぬ伯父米寿の杯かざるだけ

今治市 今井松花

靴下とパンツ一度に脱ぐ文化

愛媛県 小山悠泉

愛の一言が嬉しい少年 A

大阪市 河原林比呂路

青き天あるから女墮ちきれず

神戸市 川崎志朴

ラッシュアワ踏まれて笑うゆとり欲し

樫原市 岩井本蔭棒

栄転の発車時刻へゆとりもつ

泉佐野市 大工静子

着飾りし娘の足どりのきこちなさ

弘前市 小山内貞男

現世に硝子張りなどできようか

堺市 栗本藤持

事あれば一億みんなそっち向き

高知市 竹崎寛  
公害など知らぬ真赤な陽が沈む

松江市 興富善子  
表彰に内助の功が見落され

大阪市 新川貞祐  
浮き沈みもぐりっ放しの五十年

高槻市 山田スミ子  
みの虫に春が来ている桜咲く

大阪市 本間満津子  
ままごとに家庭の事情がちらと知れ

大阪市 花田繁子  
近過ぎて手ぶらの花見物足らず

大阪市 今井隼人  
吉野より今が見頃と便り来る

大阪市 村島秀村  
花だよりどこが良いかとさざりあい

大阪市 松岡進  
老人会カツラかぶったのもまじり

大阪市 木村渚水  
親切が暗い世相に灯をともし

大東市 広畑賛平  
つつじ見てついでながらの神詣で

大阪市 鈴木生仏  
蝶蝶の来るまで待てず桜散る

# 山陰紀行

— 山陰 観桜川柳大会

西尾 栞

新大阪駅集合は四月十五日午前九時。つき子さん、岳人君、天笑君、百酒君。珍しく早々と小松園君がやってくる。今日の雨の原因はこのためと毒舌も出る。

指定席が入り手できず岡山までの五十八分は立ちん棒覚悟の上ながら、矢張りつらかった。むし暑い車内で、天笑君から冷たい缶ジュースが配られた。若いながらよく気のつく人である。

三石のトンネルを出ると、早や雨の岡山駅へ着く。

乗り換える、伯備線は九番線だ。

ここでも指定席券の持たぬ我等一行は、ドヤドヤと、自由席へ乗りこんだが、之亦満員で赤字国鉄は嘘のようである。もう立ちん棒は嫌だ。食堂車、食堂車という合言葉で、ホームへ降りて食堂車へ走る。食堂車は汽車が発車しないと、入れてくれない規則で、三分程入口で待たされて、ゴトンとゆれると同時に六人是一番乗り。四人掛のテーブルに三人ずつ二組がコンパに座って、先ずビールだ。一人前九〇〇円以上が税金つくからとの含み

で、岳人君が勘定係になって、チーズからサンドウィッチと、こまごま注文して、新見着まで一時間二十分を、ここ動かしという算段である。

雨に煙る倉敷の家並も、高梁の城趾も、ビールと雑談の中に過ぎて、特急やくも一号は四分延着の十二時七分、新見駅の構内へ入った。ここで芸備線に乗りかえる。

乗りかえた、芸備線は、二輛連結で、一輛が指定席、一輛は自由席となっている。綺麗な方のクッションの良い席を探したが、ここでも亦満員だ。思えば今日は土曜日である。仕方がないから、汚ない方の悪いクッションの席が、ガラ空きだから、その方へ陣取る。

各自の鞆から二合壺が出る、ウイスキーが出る、おつまみが出る、雲丹も出る。とやりだしているところへ、専務車掌が乗車券拝見に廻って来て、ここが指定席だという。

「ギョツ、ギョツ、ギョツだ」と汚ない方が一〇〇円出す指定席で、美しい方が自由席とは酒の味の変る思い。泣く子と国鉄さんには勝てんから、仰言る通りに払う。

「やまのゆ」と銘うった、二輛連結の急行列車は、山また山をぬけて、一時間五分で、備後落合へ到着。ここで五十四分の待ち合せで、木次線に乗りかえる。昼日中とは言え、山の中の雨の駅はまことに佻びしい。

それでもホームに売店があって、おでんそばが売っていた。早速六人が群がる。

五十を過ぎた許りの婆さんが二人、聞きかえしてもわからん言葉で、おでんそばをこしらえてくれた。おでんそばというのは、そば台に、半分のちくわと玉子の煮ぬきと色蒲鉾二切と入っていて、一〇〇円である。すこしぬるかったが、ビールと酒で奈良漬のようになった腹には旨かった。横にコップをそえた水呑場があった。蛇口をひねると、清冽な水がほとと走った。冷めたい。婆さんにきくと、山水をひいてあるんだと言う。グット一のみもう一杯。

十四時九分発の木次行が向う側のホームに入ってきた。傘をさして渡る。列車はガラ空き。列車の中へぬれた傘を、ひろげたまま乾す。まことにローカル線の有難いところである。岳人君は袂掛に頭をのせて、さも考えているような格好で眠っている。小松園君は週刊誌を見て一人悦にいらっている。あとの四人は明日の兼題の作句だ。雨は止まない。車窓に、斐伊川(簸の川)が、神話の八岐の大蛇のよかに蜷屈して、素晴らしい景観をそえている。おきか退屈して、人恋しきこたは頃、列車は出雲横田に着いた。きけばここには高等学校があるそうで、学生さんが沢山乗ってきた

あわてて傘をたたむ。前の座席に女学生が座った。雲州算盤や、鬼の舌震の話から、鳥取大学へ入学したことで、次からかへと話し、彼女は出雲三成まで下りて行った。

いつしか雨は止んでいった。十六時、待望の木次駅へ着いた。改札を出ると、明朗さんと正朗さんが、固い握手の中に出迎えて下さった。雨上りの綺麗な舗道を向うへ渡ると、観桜の舞台、斐伊川の桜の堤であった。

へ桜ごころは風はや散らぬ

木次駅はななおさら

と人情豊かな唄を書いた雪洞に、折からの夕風に花吹雪となつて散つていった。溪谷をぬつていた美しい水の流れの斐伊川は、ここでは悠々と平野を行く川となつていった。

桜の堤を三〇〇米程あるいて、堤を下り、県道を横切つて少し入ると右側に、堀江正朗さんのお家があった。家の前迄出迎えられた芳子さんは、小走りに走つてきて、一同に抱きつかん許りの感激ぶりの歓迎であつた。あとで、岳人君は、小松園さんと芳子さんとあは初めでの出会いだときいてびっくりしていった。句につながる縁は、遠くはなれていても、一瞬にして、熱い血潮のたぎるものがあった。家の中には、路郎先生の短冊を初め、白柳さんの軸や、その他の柳人諸氏の短冊がかけられていた。芳子さんのお手前で、おいしいおうすを、二ふくすつたいたいだいで、旅の疲れが、すつとんでしまった。一時間程にして、正朗居を辞し、再び桜の堤を歩いた。町には桜祭りのピラが戸毎に貼られてい

て、木次の町の自然を愛する心と、四季の移り変りを楽しまれる余裕のある、一万三千人のこの町の人達の恵まれた環境を心から羨しく思った。

今夜の宿は、料理旅館畑旅館であった。廊下づたいに、奥に入ると、池があつて、澄みきつた水に、真鯉と虹鱒が、喜々と遊才していた。奥の離れに靴を脱ぐと、そこは十畳と八畳の二間づきで、両側に前栽のある、明るい良い室であつた。

明日の司会をする、勇さんが見えて、七時半から歓迎宴をするという、あたたかい言葉に恐縮した。

表座敷の広間に集ると、立派な御馳走が並んでいて、特に鯉の卵でまぶした、鯉の糸作りには一同舌鼓をうって、益を重ねた。

明朗、白汀、正朗、清泉、勇、芳子、秀子、孝華の諸氏のサーブスで、宴正に酣の時、正朗さんの娘さんの初子さんが端麗な容姿に、綺麗な瞳をかがやかせて、臨席して下さった。一同賞讃の声を発するやら、喜こぶやらで、宴は正に最高潮に達した。

十一時お開きになって、就寝。

朝食をすませて暫らくすると、緑之助さんと水客さんが正朗さんの案内で見えた。緑之助さんとは、去年の九月以来だった。来年五月の緑之助さんの句碑建立の話を色々とした。そして当日は川柳社から、すくなくとも三十人は出席するでしょうと話した。

十一時過ぎに一行は会場へ着いた。既に五六十人の人が席題にとりくんでいた。

大阪組の席は正面に設けられていた。即ち小松園、水客、天笑、百酒、岳人、栗の六人して、つき子さんの弁天一人が入つて、期せずして正に七福神が、正面に並んだことになつた。はからずも、今後のむらくも吟社の益々榮えることを寿ぐ、七福神の列席であつた。紅一点のつき子さんは、席題「根負け」の選者として、立派な披露された。

十二時四十五分にめめ切られた、兼席題は、勇さんの、ソフタツチな名司会で、スムーブに而かも和やかにすめられた。私達は懇親宴にも臨み、用意の車をいただいて、十六時四十一分の急行、ちどり二号に乗れたことは誠に有難いことであつた。

大会の模様や句報は、むらくも吟社の方で、委しくされることと思うので、ここに割愛する。十八時二四分、列車は米子駅についた。出迎えの瑞枝さんと悦子さん、同行して下さった、孤呂二、鶴丸、竹馬さんと松江から乗られた通居さんと一行は、三台の車で、今夜の宿皆生温泉弓ヶ荘へと走つた。

夕食には、米子の皆さんも付き合つて下さつて、今夜も亦賑やかな宴会となつた。

千代さんからの差し入れだと言つて、路の藁と蟹の卵のあえたのとおいしいお漬物が出された、珍味とはこのことで路の藁の香りが今尚口の中に残つているような気がする。

九時半、アルコールにほつた頬を、皆生の浜風になれぬもの、一同十二人は松並木をぬけて浜に出た。海岸に立つた、つき子さんは、父はこの隣の、淀江の出身ですの

と、暗い夜の海をジッと眺めていた。それから春宵一刻の皆生の灯の街を流して、米子組の三人の方と別れて宿に帰った。

翌朝九時半、宿を出て出雲清水寺へ松江の二人の案内で参詣した。こんな山奥と思うところに、立派な三重の塔をもった、清水寺を、苔むした石垣の上に拝んだ。

登りつめた息づかいを、清浅亭で、羊羹とお茶で咽喉をうるほした時は、柳友の友情をしみじみと嬉しく思った。

清水寺の下の売店に預けた鞆を、各自持った時、ここで、新築の鶴丸居を訪問する、小松園、天笑、つき子さんの三人と松江の二人と、百酒、岳人、栞の三人と袂を別つことになった。

十一時四十分、米子の駅へ着いて暫らくすると、瑞枝さんと竹馬さんが見送りに来て下さった。十二時六分発、やくも一号は相変らずの満員で、ここでも食堂車にもぐりこまねばならなかった。

瑞枝さん等の下さった、ウキスキーを高々とかがけて、窓のあかない食堂車から、お見送りのお二人に厚く厚く御礼のゼスチューアーを何回もした。間もなく列車は、岡山へむけて発車した。美しい瑞枝さんの顔がだんだん小さくなって、やがて見えなくなつた。

今度の旅行について、木次の方々、松江、米子の皆さんに大変お世話になりました。茲に謹んで厚く御礼申し上げます。

## 小川静観堂先生を訪う

ペン 不二田二三夫  
フォト 有信 新之助



右から有信新之助・小谷葉子・周平ちゃん  
小川静観堂先生・幸平ちゃん・不二田一三夫

八月号を「終戦記念号」として、何か特集したいとは長い間の懸案だった。だが毎年ス

ペースがないためふんざりがつかなかつたのだ。小川静観堂元陸軍軍医大佐と、福井野迷路元海軍軍医中將をわずらわせず、ことしはなんとか実現したいことを東野大八氏におたよりのついでにもらしたところ、  
「川柳と將軍と兵」というタイトルをいただいた。氏は「兵」を買ってくださったのである。

いぜんから静観堂先生が葉子さんとぼくに一度会いたいと云っておられたので、四月十六日おもいきってお訪ねすることにした。車とカメラはいつものように新之助さんである。

伊丹市春日が丘は静かな町なみである。しかし航空機が往き来するためこれも公害騒音に悩まされている。

静観堂先生とは午後二時から三時までにおじゃまする約束だった。ざりざりの三時になつてしまったのでお待ちかねのごようすだった。「うれしいな、よう来てくださるぞ」

かつては戦場から戦場へ志願してまで医療をもつてご奉公された武人だが、第一印象はおだやかなご隠居さまである。

先生の部屋は旅館のようで、広い庭園には照明灯まであり、うかがえば千三百五十坪だそうである。これを戦後、先年逝去された夫人の才覚で買われたそう。

「えらい女房でした」と。

部屋に柱には、

――俺の余生遺影の妻と差し向い 静観堂の短冊がかかっている。先帝陛下からいた

(完)

# 川柳五十三次 (三十一)

## 富士野鞍馬

### 42 桑名

海上を七里わたるとこじきなり

(安五義5)

—「近江泥棒伊勢乞食」という悪称がある—

宮から海上七里「二七・五キロ」桑名は、揖斐川の河口に近く、伊勢湾の要港として、はやくから発達した。この港の入口に桑名城があり、今日もその石垣が残っている。広重の絵も桑名城と宮の舟を描いている。

船中で見れば桑名は蟹気楼 杜蝶(八二〇)  
桑名宿松焚煙の蟹気楼 三箱(二二一五)  
乗り出すと桑名の城は蟹気楼

尚古(八〇二二)

と、川柳は、名物蛤にかけて、蛤から上現するといわれた蟹気楼を桑名城に見立てて詠んでいる。

この桑名城は、天正(一五七三—九二)の

はじめに、滝川一益が建てたのであるが、関が原合戦(一六〇〇)後は、徳川氏の重臣松平越中守の居城になっていた。万治版の「名所記」に桑名、

「右の方に城あり、町中を上るに、大手の橋左の方にあり。ここは蛤の名物あり。蛤は諸国にあれども、貝合(かいあわせ)の貝になるは、伊勢の蛤にまさる事なし。貝厚くして破れ難しといふ。牡蛎も伊勢をよとす。真珠も余国よりはこの国の珠を上とす。蛤のみを串にさし日にほして、あさりとかや名付けて売なり。」  
と記され、名物焼蛤を売る店も多くあったので、

朝嵐桑名の飯もしづか也

鮎島(二八二)

一家中焼蛤の珍らしさ

春風(八〇三)

桑名では嫁が焼いたりいぶしたり

喜朝(二二三)

だいた金鶏勲章や勲三等の勲章など二十数個が生きた戦史として輝やっていた。

「酒が好きでね、伊丹に住みたいのです」とは、伊丹は酒どころである。

「路郎先生にお会いしたのは昭和何年だったかな、岩崎柳路氏に紹介されましたね。そのころへたな川柳を作っていたので、「こんな川柳じゃない」と路郎先生から叱られましたよ」

路郎先生が北支蒙疆へ行かれたのは昭和十三年九月十八日から十月二十一日までだから日支事変中である。東野大八氏にお会いしたのもこのころか。

静観堂先生の初恋物語や、夫人との逸話などを書きだせばキリがないので次ぎの機会にゆずるが、幸平ちゃんと周平ちゃんのお孫さんを可愛いがること、どここの家庭でも見られるよいおじいちゃまぶりだった。

「気をつけ、敬礼!」と号令されると、三歳と二歳のお孫さんは、直立不動からさっと手を顔へもっていく。ばくが号令したも敬礼して見せてくれる。可愛いお孫さんたちだ。「この庭にある石で句碑を作りたいのだが、どの石がよいでしょうか」

りっぽな石が十ほど植込みの中にある。市街一目眺望のそこに樹令数百年の大木もあって、ここに句碑が建てばさぞや一大景観を呈するだろうと思った。

—美しいお人ときめてまたよう会わす

四月号発表の句を葉子さんに見せるなど、八十四翁には見えない若さは尊い。

桑名の娘はっかりと明てうり

東水(三三三)  
売物と買手桑名で口を明き 水治(七〇五)  
桑名にて焼かれる声は雀なり

射夕(四二二)  
一雀海中に入って蛤となるという一  
旅なれぬうちは桑名で口をやき(拾三)  
猫舌は取りのこされた宮の舟

風嵐(四二二〇)  
猫舌は舟が出ますに大困り

十九番(二二二六)

一熱いものに苦手を猫舌という一

と川柳にそれが詠まれている。また、  
蛤をくふと椶が遠くなる 鼠弓(傍初五)  
という川柳があるが、伊勢路は五十町一里で  
あったという。椶は一里塚。

蛤を桑名此頃生マで売 一東(八二二五)  
と売女も蛤で詠まれている。

#### 43 四日市

桑名から四日市は長丁場で三里八丁(二二・七キロ)である。永禄年中(一五五八—一七〇)には、四の日に六斎市がたったので、町の名になったといわれている。江戸の四日市も、同じようにむかし四の日に市が立ったので町名になったのである。

四日市喧嘩の中に牛は寝て (武十七三)  
伊勢路への追分江戸の四日市

清深(八〇〇)

と川柳に詠まれ、四日市を出るとすぐ日永の追分である。ここは参宮道と東海道との分岐

点で、伊勢神宮の一の鳥居が立っている。広重の絵にはそれが描かれていて、茶店の看板に「名物まんぢう」の文字が見える。

四日市茶汲揃ひも江戸の水

梅丸(二六五五)

四日市の旅籠は、南町と北町とに百軒ほどあって、数百の飯盛女が居て繁昌した。

#### 44 石薬師

石薬師は四日市から二里二十七町(一〇・八キロ)。古くは伊勢参りの駅であったが、元和元年(一六一五)から東海道の宿駅になった。

石薬師という地名は、ここにある西福寺の石薬師仏が有名であるため、そういわれるようになったのである。

この石薬師像は、弘仁三年(八一二)弘法大師が巡錫の際、ここにあった自然石に薬師の像を刻んだと伝えられている。

伊勢の刷毛秋葉と薬師なでる也(二〇一三)と川柳によまれ、伊勢参りのついでということになっている。

このあたりには、日本武尊が東征の際、足をいためて剣を杖にしてのぼられたという「杖つき坂」がある。

醒が井までは足びきの日本武

自慢(二四八二五)

むつかしい坂をしのいで御入国

(明六九一)

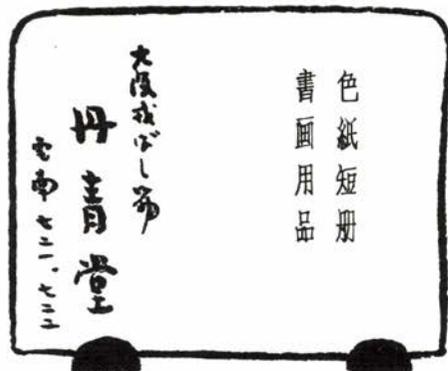
と詠まれている。

「野迷路先生にお言づけください、東郷元帥の短冊があるのですよ」

茶室に「君が代は……」の国歌が見事な筆で書かれてあった。新之助さんにはビール、葉子さんの大好物の寿司。ホームバーなど、まったく旅館のような部屋の美しさに魅せられ、もっとおじやましていたかったが、六甲からの百万ドル夜景見物もこの日のスケジュールにはいっていたので六時すぎ辞居することにした。

戦後川柳人に会われたのはぼくたちが最初だと思ふ。ぼくたちの車を見送る静観堂先生はちよっとおさびしそうだった。

(この夜のテレビニュースで川端康成氏の自殺を知る)



# 「先生」漫筆

室山三柳

「先生」という語は便利なことばである。用いられる範囲が広いことと、やや敬意をこめた感じがすることが原因だろうと思う。先生と呼ばれる、和服姿の画ときもいもうろく思ったことをおぼえているが、古川柳の方では有名な「先生と呼んで灰吹捨てさせる」（一・38）や、「先生へいかがと問へばそんなもの」（拾九・26）などと、はなはだかんばしくない。先生とよばれて早く死ぬやうな（安元松<sup>4</sup>）はまだ可愛らしい方である。

わたしは小学校卒業後、本屋の丁稚、薬品卸問屋の小店員、新聞社編集局の給仕、私立大学の給仕をしながら夜間中学を出て、神職の講習を受け、当時の社格での府社へ勤めたのであるが、ここですでに参詣者から「先生」と呼ばれた。やや脱線するが、この神社に在職（夜は専門学校通学）中、一年繰り下った徴兵検査で第三乙種合格、間もなく現役下の歩兵として入営、終戦時は志摩半島の山中に十二名でランブの生活をしていった。体重四六キロ、身長一六三センチで猫背のわたしの軍隊生活は、今、考えてみてもよくも身体が続

いたと思われるし、虚弱体質の上、（関西的にかけて）ドンクサイの最たる男であったから、失敗・珍事続出であった。すこし暇ができたらその「弱兵記（もしくは「弱兵譚」）を綴ってみたいと思うのだが、たいへんな量になることでもあり、手をつけられずにいる。なお、検査の徴兵官は奇しくも給仕をしていた学校の配属将校（大佐）であり、益・暮には心付けくれた温容の人だったのだが、「第三乙種合格」と怒鳴ったあと、「神主なんかして、でれでれすな。」と大声で叱りつけたのはびっくりした。これは、検査日の二・三か月前、その大佐が神前結婚の仲人としてやって来た時、よせばよかったのに、以前の心付けを貰ったうれしさが記憶にあつたのと、なつかしかつたので挨拶にいたから、むこうも覚えていたのだろうと思ふ。この大佐もむろん「先生」と呼んだ人である。

昭和二十年九月十三日復員。職場と学校へ復帰。二十二年二月、在学中から教壇に立った。（その少し前から、小さな塾を開いていた。）本来「先生」といわれる仕事に就いたわけである。

十数年前、知人から「先生なる語は日本ではいつごろから用いられたのか。」と聞かれたことがある。少し調べてみたが、わからななかつた。しかたがないので、故新村出博士にぶしつけながら手紙を出してみた。博士からは「面白し面白し、暇をみて調べてみん。」といった意のおたよりをはじめとして、三通も

おはがきをいただいたが、はっきりしないまま博士の御逝去となつてしまった。戦記文学などに出て来る「先生」（せんじょう）は辞書によると、春宮坊（皇太子の御所）付きの役人で、帯刀の長官のことである。「宇治拾遺物語」に「わ先生は」といった対称の代名詞に使っている例があるが、これが現在われわれの使用している「先生」に近いものである。中国では古くからセンセイで、師の意もある。

代議士・地方自治体の議員・政治関係の人  
・弁護士・医師（看護婦・事務員を除く）  
・医学界の人・芸術家・芸能関係の人、はて

は、易者・巫女もこれ皆「先生」である。学校関係でも、教員以外の人をそう呼ぶことが多い。たしかに、「君」などという親しく「あなた」もしくは「あなた」と少し親しく「先生」といった方が相手の感じがよいことはたしかだろう。三年ほど前、さる能楽師の方から依頼を受けて作った新作能の台本に、少しく手を入れて旧冬出版した。その人と、お互いに「先生」といわずに行こうと約束めたことを最初に書いたのだが、作曲その他の関係で（作曲はむろんその人の担当）何處か逢つてゐる内に、いつの間にか、どちらからも「先生」が連発されることに気がかざるを得なかつた。これは双方とも、人から「先生」と呼ばれる職業だからやむを得ないとはいえずよく使うことばであるのと、なまじい「あなた」なんていうと、何か意識してしまつて、

会話がスムーズに運ばないからだろうと思う。露地裏の古ぼけた借家に住んでいるわたしを、教職にあるせいであろう、「先生」と呼ぶ近所の人も二・三ある。「おじさん」と呼ぶ。名を知らぬ人は「おじさん」となる。「おじさん」なる関西風の呼びかけはほとんど聞かなくなった。もっとも、かげで話す時は下町らしく、「おっさん」・「おぼはん」であるらしいが……。いつぞやトラックの運転手から「オッチャン、オッチャン。」と呼びとめられたのには閉口した。小さい子どもならともかく、一人前の若者の口から発せられるから、自分が三文の値打もないように感じられるから、ことばというものはおもしろいものである。「おじさん」では肝を冷やしたことがある。勤務先で小人数の会議があつて、午後十一時過ぎ、「心細くもただ一人」、木曾義仲ではないが御所（京都御苑）を抜けて帰ろうとした。ふと見ると、向うからフラフラしながら大声でわめいて来る若い男がいる。どうせ酔っ払いだろうといつもの近道へ入りかけると、その男が急に走り出した。こちらへむかって来るらしいな、と思つているうち、たちまち、わたしの横へ姿を現わした。三角形の一边を利用したわけである。しかたがないので、わたしも向き直つて相對峙する形になったが、先方が何もいわないので歩き出した。ついで来る。しかし、ものの二分もあれば人通りこそ稀だろうが車の往き来する電車通である。たかをくくっているわたしの背にかかったのが、この「おじさん。」であ

る。やむなく立ちどまつて「なに。」と問うたわたしに彼は、「こんな暗い所でお話してすみません。」という。そういいながら身を木かげに寄せる様子である。わたしはもう一度「なに。」といつた。男は黙つている。強盗でもなさそうだが、気味も悪いし、何かの拍子に怪我をしてもつまらない。数十秒返事を待つて歩き出した。また、ついて来る。草原が切れて砂利道にかかる頃、わたしは思はず走り出した。道路を斜めにつつ切つて向う側の安全地帯に到達してふりむくと、男は向いの方から「貴様は卑怯者だ。」と怒鳴つていた。

何か払いのけたい気持で、いま少し走つてタクシーをとめたが、翌日、わたしと同じく排気ガスをきらつて、（わたしの場合、それ以外に土の道という魅力もある）御所を抜け

**一分間の柳論**

◇川柳は詩であり作文である。作文には主張がなければならぬ。主張のない作文なんて、貞操のない女と同じだ。取るに足らぬ。笑いと風刺とかうがちとかは作為するものではない。作者の主張の中から読者が、感得してくれる筈である。

大阪の善意は金で見積られ  
吊皮は手枷 生涯平社員 柳 志  
この句から風刺を感じるか、笑いを誘うかは読む人の人間にある。自由である。

## 本多 柳 志

◇作文するからには、読む人に解つて貰わねば意味はない。文章の表現にも自ら限界がある。何でも書けると思つたら大間違いだ。

詳しく書く程解らなく、簡単につまり省略する程よく解るのは文章の七不思議である。一字を加える要なし、一字も省くを得ず。これが作句の極限であろう。文字の省略にいのちをかけることは、作家の作家としての誇りと、宿命でもあらうか。

い声音であった。結核をやつてから学校の体育祭にも走らぬようにしているわたしが、全力で駆けたことよりもその声の方が印象に残っている。

今朝届いた雑誌「観世」の「印度のぞき」(宮尾しげを氏)によれば、万国博の印度館の案内役をして日本語を覚えたインドの案内兼通訳人は、誰かれの区別なく日本人を「先生」と呼ぶとある。「先生」もここまで来たかの感である。(古川柳研究家)

## ごだやら千一夜

石丸弥平

この場合、ごだやらは泥酔と解釈して下さい。

山西省の潞安に向いた折、宿を出る僕に「ポーンエに気をつけなさい」と中国爺が言った。何の事か始めはわからなかった。当時、僕は北京の新民会(元宣撫班)にいた。

ポーンエとは破靴で、夜の天使のことであった。

河北省の保定近くの宿で「イエジイがいるぞ」と、イエジイツマリ野鶏、夜の小姐のことである。成程、文字の国だわい。

中国の女性と酒を酌み交すときの、くどき文句と悪知恵をつけたのは悪友である。「ヤ

ンヤンマ」と言えという。

ある酒席で隣の小姐に少し酔ってきたので「ヤンヤンマ」とかけたら、彼女、僕の顔をキョトンと見ていたが、急に顔を覆つてゲラゲラ笑い出し逃げてしまった。

その筈である。中国の友人曰く「ヤンヤンマ」というのは愛のテクニクの際、くすぐったいという閨房言葉だそうである。

書き出しから大分不謹慎なペンで始まったので、駄文の彷徨を赦されたい。

わが愛する俳人の魚里先生の家屋構造が、庭を囲んで四角に棟が取巻いていて、ジャスマンの花はないが、中国の院子を思い出すので、それが、とんでもない連想となって記憶を呼び返すわけで、川は低きに流れ、千一夜は低きを蘇がえらすわけである。

和田魚里こと魚里先生は芋銭の蒐集家であり画人(画家にあらず)である。つまり文人墨客の稀な御仁です。絵もうまいし、書もうまい。

あの夜、友人が来て二、三本銃子を倒すと、急に魚里先生に逢いたくなった。

友人と二人で押しかけたが、下地が入っているので、酔うまいと思つたに、魚里大人は独身なので遠慮なく丁戴したると、西も東もおぼろおぼろになってしまった。

朝、わが家のふとんの上で目を覚まし、「しまった」後の祭りのごだやらだった。

女房の解説、二人で肩をかけて十二時すぎにやってきて、応接間でまた、飲み出して仕上げに二人で丼飯に汁をかけて食い、冷蔵庫

から犬用の生肉まで出して食べたというのである。

霧の深い夜で、再び二人で肩を組み乍ら、でかい声でゴンドラの唄をわめき霧の中に消えていったということだった。

魚里先生はもう七十越しているが、実に水々しい感覚の俳人で、魚里句の色彩感、自己凝視の透徹した深い認識に共感するのだが、魚里先生は関東の永田耕衣と一部で高く買われる宇宙認識を体している俳人だが、いつか魚里宛の永田耕衣の手紙を見て驚いた。

封筒にはみ出すばかりのつぶし字で、その稚拙味、便箋にはこれまた五行位に初号活字大のでかい文字であった。

青竜刀先生に蔵王の宿で、魚里俳句を大いに推賞したが、俳人沙人はそうかねえと取あつてくれなかった。

蔵王温泉に青竜刀先生と出かけたのは僕の友人が某旅館の支配人をやつていて、五月の蔵王は実にいいから来いよと誘われていたので、山形へ一回行ってみたいという先生の案内役を買ひ、ついでに山形川柳大会に廻ろうというもんだ。

ところが山形大会で、懇親会の席上とんでもない暴言をやつてしまうことになる。

一人一人挨拶や歌を披露したのだが、(この時は酔っていません)「エー仙台の大羽比羅夫が先輩の藤原英比古さんに対し、石戸かなンダあのヘッポコ絵描と申した相だが、なんだアー大羽の野郎」さア、仙台市民川柳会長が目の前にいたから耐らない。ちば東北子

顔色を変えて怒り出した。

われわれの顧問大羽先生を罵倒するとは赦さん。「しまった」ここには仙台の柳が参加していたんだなと気付いた時は後の祭り、その場は天石庵氏や若山大介氏が仲に入ってから、仙台の血の気の多い連中は俺に委せてくれ、心配するな弥平よと温かいご書面を戴き、またまた、すっかり恐縮してしまつた。

まるで牛若丸の文章で勘弁して下さい。

魚里大人から沙人さんにやってくれよと、魚里句集「機」六阡円の豪華本を頼まれ、渡す機会がないまま、郵便で青竜刀先生に送つたら、その返報がきた。魚里作品に始めて接し、仲々いい、脱マンネリで実に話せる作品と大いにあの毒舌家先生が賞讃されていた。これで蔵王の仇は打ちました。(先生、失礼)財界の重鎮、木川田一隆は七十一才にして「このバカヤロー」と叱りとばす姉がいる幸いな男であると評したのは草柳大蔵だが、成程ナアと暫し思う。

世を恐うて人を恐るる夜寒かな一鬼城

一人で飲んで、ごだやら近くになると、急に寂しさがこみあげて知あいに片っ端から電話をかけて肩を組みたくなる。

電話で数度被害を受けた面々は、かつしか吟社の北斗先輩、川柳研究の正敏幹事長、清志、三朗両幹事、更に田中不倒人先生、この不倒人先生は誠に出来た人である。

いつか「きやり」句会の帰り、四、五人で飲み、最後は先生と八戒おじさんと三人にな

つた。

不倒人先生の練馬の桜台まで送ろうということになったのからに乗つたあたり既にござらである。

桜台の駅近くで車を降りてからがいけなかつた。

降りた途端、街の愚連隊と僕は派手な大立廻りをやらかした、止めに入った八戒おじさんが今でも手が痛むと仰言られると、僕は孫悟空になって逃げたくなくなってしまふのである。

その後始末に不倒人先生が交番に謝罪にゆこうと連れてつてもらつた時は、ごだやらを脱していた。勿論、警官が介入したわけである。

## 一分間の柳論

「旅人」の序に、私は川柳によつて人間愛を求めてやまなかつた。とある。

この人間愛は、単なる人情ではない。人間愛の根源をさぐる求道精神に他ならなかつたのである。少なくとも、いわゆる川柳の三要素など眼中になかつたのではあるまいか。川柳は抵抗の精神をもつ詩と定義する人、また時代感覚が必要だととなえる人もある。私は川柳に定義をくだそうとは思わない。

川柳もまた一つの詩であると考え、私は、知を追求するよりも情を追求する。す

家に帰って後悔しまして迎い酒をごくごく飲んだら急にまたごだやらになつてきた。女房の解説です。不倒人先生宅に、その後再三度、午前三時の深夜電話をした相である。

暫らく顔むけもできないと謹慎し、二九年振りて某句会で先生に逢つた。

「どうしたい。元気かい。」と矢庭に手を握られて僕は身のおきどころもなかつた。先生曰く「弥平くんは俺が帰つたのかなと心配して電話をかけてくれたんだ。有難う。」僕はその時不倒人先生がすばらしく大きな人に見えた。胸の中がキョンキョンと鳴つた。(川柳漫画家)

## 香川酔々

なわち川柳を、情の文学としてである。

知を追求する論理性を重んずる学問、たとえば、数学の世界では、公理、定義、定理が必要である。情の文学に、定義は必要だからである。もちろん、この情は、人間愛を探求しようとする情である。この情の追求を十七字(音)で、日本語でしか唄えないリズム感で行なおうとする独特の短詩である。

革新派と称し、本格伝統派と称する、それは、その作家自身の表現方法で分類されているのに過ぎない。

小 走 り

久米奈良子選

後つけていると小走り知っている 宵明  
耳よりな話小走り持つて来る 里風  
小走りや々と追いつく子の歩巾 軒太楼  
小走りに厚着の裾が邪魔になり 同  
呼び出し電話へ小走りけつまずき 同  
小走りが二人出合つた十二月 洋々  
姿見えてから小走りになるデート 素身郎  
来客へ妻小走りの市場籠 英子  
信号の黄を小走りで渡り切り 伶人  
先生も小走り急患迎え入れ 英詩  
小走りに母が迎える里帰り 同  
小走りに新聞少年露地を折れ 代仕男  
小走りで軒端を借りる俄雨 同  
見えるとこだけ小走りできた遅刻 重人  
小走りの向うに鍵っ子待っている 翁童  
小走りの人についてく事故現場 好一  
小走りで妻は帰りを聞きにくる 好枝  
小走りでもうひと言を置く女 同  
小走りの素足がきれい祇園町 初甫  
小走りでガチャガチャ入る牛乳屋 同

金策の出来て小走り帰つて来 秀峰  
小走りが大きく泳ぐ道の石 本蔭樺  
大股と小走りで行く夫婦仲 同  
小走りでガイドの声に従いてゆき 魚山  
小走りで お百度雨に負けぬ足 祥月  
駅までは小走りでゆく共稼ぎ カズエ  
追いこしてから小走りの歩をゆゑ 同  
小走りの足に小犬がじゃれてゑ 杜月  
小走りで使ひ上手が戻つて来 輝親  
小走りに従う妻の足を待ち 豊生  
小走りにズムでポケットの小銭を 鬼焼  
小走りで母が握らず金包み 鎮也  
小走りに廊下を急ぐ始業ベル 綾女  
小走りに近づき挨拶して別れ 同  
佳  
小走りで子が順を待つすべり台 利美  
襟立てて小走りとなる向い風 眺風  
小走りに出る世話役の勤どころ 昌道  
小走りで届ける活きのいいみやげ 新之助  
小走りの仔犬憎めぬ急停車 昌道  
人  
小走りになる嬉しさを抑えかね 西合  
地  
泣き声へ母小走りでとんで出る 恵子  
天  
小走りの癖まで父に似て育ち 洋々  
軸  
再会の視野小走りを受けとめる

仮 面

浜畑胡蝶選

お人好し仮面を知らず策に落ち 佳女  
金策が出来て仮面出さず済み 英子  
シヨックだろうと仮面で押し通し 木魚  
人生の舞台で演ず仮面劇 伶人  
お見合いは仮面と仮面さぐり 同  
妥協する仮面つけたりはずしたり 同  
貞淑な仮面絶えないスキャンダル 静歩  
仮面つけ続け一生幕がおり 代仕男  
あばかれた仮面ニセ医者ニセ医大 露杖  
エリートと云われ仮面はずさない 止水  
七人の敵へ仮面が見がまえる 翁童  
ひよつとこの面で或日を耐えても 梁水  
今日も我れ善人として仮面はぐ 好一  
怪獣の面それぞれに子が戻り 秋女  
背信の仮面を妻に見透かされ 昌道  
仮面もう要らなくなつた日の誤算 久司  
或る時は仮面をかぶる宮仕え 暁明  
愛憎へ仮面脱いだりかぶつたり 里風  
仮面脱ぐ悲劇の幕のおりる刻 千代香  
金子を借る時は素顔と云う仮面 千翁

真情にほだされ仮面揺れ動き  
月光仮面へ少年の夢があり  
時折りはかけたいじエロにも  
白昼夢夜の仮面に青い性  
我が家まで仮面をはずす千鳥足  
栄転の辞令へ仮面はずさない  
真心に触れて仮面を取って見せ  
夜には夜の仮面でつけ追うボルノ  
信頼を裏切る仮面の憎らしい  
三次会そろそろ仮面脱いだ顔  
何の仮面でんねと自問自答する  
子と対話父は仮面をもちに脱ぎ  
般若面真に迫って大神楽  
簡単に女仮面をとり替える  
佳

長 生 ぎ

不二田一三夫選

長生きの父の短気が気にかかり  
長生きをしてくださいと宮田輝  
長生きしやはりませと同情され  
長生きして税の一部とり戻し  
年金のこれっぽちで生きのびる  
長生きを励ましあうも囲碁の敵  
長生きをしようと昨日云った友  
長生きにわれながら飽く薬びん  
長生きがしたくて薬ばかりのみ  
佳

軒太楼 初甫 章雅 貞祐 新之助 カズエ 七面山 洋々々 春日 三十四 古方 貞夫 眺風 眺童 宵明 重人 素身郎 志朴 里風 洋々々 利美 葵水

長生きをしてねと云うはみな他人  
長生きをして片隅へ押しやられ  
自動車さえ買わねば長生きで  
猫と居て長生き世俗に遠ざかり  
長生きの母鉄道の歴史とく  
ひこ嫁ぐ日へ寝床から祝いのべ  
長生きしいやと云う孫山で果て  
長生きをしてねと書いて親を捨て  
子や孫の菩提弔らう日の挽歌  
長生きが増えてホームが間に合  
人間の干物のように長生きし  
難聴を長生きの相とおだてられ  
長命論 医師と易者がくいちがい  
長生きの実感がわくトソの味  
妻がいる限り長生きするつもり  
長生きはデートを兼ねた寺詣り  
長生きのピカソは若い嫁をとり  
長生きをする気の貯金置いて死に  
不節制の男長寿の秘けつきき  
長生きをした祖父酒が好きだった

秀峰 止水 素身郎 軒太楼 鬼焼 魚山 新之助 杜月 千代春 バット 英子 春日 智司 利美 恵子 輝親 佳女 貞男

灯を消してひとり心の仮面脱ぐ  
よろめきの誤算仮面がはずれかけ  
定年退職仮面を脱いでどっと老け  
誘惑に負けても見たい仮面持ち  
般若の面脱げば冷え切った女  
人

生命保険 長生きすれば損のよう  
長生きは楽し 両手は孫のもの  
長生きの相で人さま疑わず  
戦死した子らの分まで長生きし  
長生きしすぎたと祖母ひとり留守  
人

久司 里風 白江 国彦 三和 佳女

仮面もう脱いで酔いたい日が続き  
地  
酔う程に紳士の仮面横にずれ  
天  
知らぬ間に仮面をつけていた焦り  
軸  
肉親と云えど仮面のふしあわせ

婆抜きと云うから長生きしてや  
泰然自若人生の午後を生きている  
天

金杯のコレクション 九月十五日 初甫  
▼「長生き」は木山要次選のところ、要次  
氏の急病で一三夫選となりました。入選句  
に逸名とあるのは雅号の記入がなかったた  
めで、ご投句には一題ごとに雅号をお忘れ  
なく――

前号「ラーメンが日本の味となる戦後」  
は西合さんの作品です。――編集部

# 初歩教室

— 題「遠」 —

本田恵二朗

どこまでも遠景富士のついで来る  
 (遠景の富士どこまでもついで来る)  
 暹曆の遠い足跡振り返えり  
 (暹曆の足跡遠く霞むなり)  
 文化には遠いが空も水も澄むところ  
 (文化には遠いが空も水も澄み)  
 遠足の日の丸弁当に母の味  
 (遠足のそれぞれ母の味を詰め)  
 冷凍魚遠い海から今日は  
 (遠海魚冷凍船で目を覚まし)  
 孫の遠足前夜よりリュックと夢を見る  
 (遠足の七ツ道具へ寝顔笑む)  
 遠くから見れば桜の薄すぎで  
 (老いの目へ霞と見える遠桜)  
 曇り空遠くに見ゆる東山  
 (東山遠くに押しやる曇り空)  
 古里は遠くにありてなつかしい  
 (海越えて住む身へ浮ぶ里の春)  
 得票の数に遠縁数えられ

シゲ  
 三十四  
 比呂路  
 濁水  
 進  
 ますえ  
 繁子  
 秀村  
 隼人  
 カズエ

(票読みへ遠い縁をあてにされ)  
 遠き日の美人壁画で甦り  
 (遠き日の美人壁画で生き続け)  
 遠足の娘は目覚し二つかけ  
 (遠足のあすへ目覚し二つかけ)  
 実感もうすれて遠い日の話  
 (遠い日の話ピントがぐいちがい)  
 捨て犬の遠吠えかすか灯が赤い  
 (遠吠えへおぼろ月夜の歩を速め)  
 遠く近く野仏と語る春の塵  
 (野仏と語る遠山暮れなずむ)  
 年が寄り古里遠く離れて来  
 (春霞古里遠くわれ老いぬ)  
 歩道橋へ遠廻りして行く向い家  
 (向い家をこんなに遠くした陸橋)  
 望遠鏡ぐすぐすして時間切れ  
 (望遠鏡十円玉だけ見せて消え)  
 遠路まず挨拶済んだ特級酒  
 (遠来へなにはさておき特級酒)  
 春霞たなびき山は遠く見え  
 (春霞山を遠くへもってゆき)  
 追憶の彼方に揚る遠花火  
 (追憶の彼方に咲いた遠花火)  
 遠くとも故郷が聞える電話口  
 (電話口遠い故郷を近うする)  
 遠いところ苦勞さんとお茶も出ず  
 (遠いところ来たのにお茶も頂けず)  
 遠廻りし興奮をたしかめる  
 (興奮をそっと冷やそう遠廻り)  
 断絶が近かるう苦を遠ざける  
 (断絶が近きを遠く遠くする)

露声  
 敏  
 好一  
 維久子  
 静観堂  
 陽山  
 まさひろ  
 静子  
 重人  
 賛平  
 露杖  
 誓二  
 富喜子  
 富喜子  
 頼次

遠方の火事半鐘気楽に打ち  
 (遠火事へ半鐘間のびた音で鳴り)  
 遠景で見惚れ近くであきれ果て  
 (遠景で見惚れ近くへ来てあきれ)  
 遠縁でトントントンと良い話  
 (遠縁という名の糸で結ばれる)  
 老いしるくお小言さえも遠のいて  
 敬遠という手で銚先かわしとき  
 遠廻りして人情を拾い当て  
 かくしやくとあの世への道ほど遠く  
 長病みへ近くの友も遠くなる  
 成功して遠縁までが寄ってくる  
 (遠縁まで寄ってくるほど出世する)  
 遠く住む不便を草に寝て思う  
 (遠く住む不便を草に寝て思う)  
 長距離の電話へ気せわしい砂時計  
 (砂時計長距離電話をせきたてる)  
 妻から見れば遠隔操作している気  
 (遠隔操作まんまとしてる気らし妻)  
 遠方と聞いて寝直す朝の火事  
 (遠火事と聞いて寝返り打っただけ)  
 遠廻りに振られている気がつかず  
 (遠廻りに振られているにやにさがり)  
 庶民には気が遠くなる保釈金  
 遠い虹ともに渡る日いつのこと  
 求めあうころ耐えつつ遠くいる  
 (求めあう愛を抱きしめ遠くいる)  
 しんそこの対話に遠いひとといる  
 (胸割った対話が欲しいのよあなた)  
 遠慮なく使えと実はつらい金  
 (遠慮なく使えと血の出るような金)

つとむ  
 静泉  
 本蔭椿  
 千夏  
 軒太楼  
 同  
 藤持  
 生仏  
 同  
 度  
 翁童  
 同  
 慶彦  
 同  
 同  
 西合  
 西合  
 同  
 利美

出世する度にふるさと遠くなり

(栄転のたびに古里遠くなり)

遠く光る富士に思わず合掌し  
合掌しは、演出過剰、合掌する気持ちは表  
面に出さないで、その氣持ちをふくめたい。  
(神々しく久遠の色で富士光る)

遠因を探れば若気の勇み足

〇〇を探ればと前置きを説明するのはまずい  
表現法だ。そして句が固苦しくなる。  
(遠因はどうやら若気の勇み足)

(遠来の悪友家計狂わせる)

(遠來がひっかきまわした家計簿)  
遠のいた足に花も散り葉の萌ゆる

同

杜 月

同

同

貞 祐

## パチンコ

不二田 一三夫

心齋橋筋でもパチンコ店が二軒、食堂に商  
売がえをしているくらいだから、パチンコも  
ボウリングなどに食われているのだろう。

昨年十月号に、東野大八氏が「バクチ太平  
記」を書いておられるが、そのなかでご尊父  
のバクチ好きを知ったことが戦前までのほ  
くときたら、やっぱりそうだった。

婚礼の夜、ぼくの花嫁が家へ来る寸前まで  
花札をにぎっていた。それだけではない、そ  
の女房が五年後に死んだが、その通夜も、ほ  
くは二階で「もう一丁」とやっていたのだ。  
負けると、そっと階下へおりてきて、香奠  
から金を抜いてまた花札をにぎる。恥のかき  
ついでにはくその当時の服装をご披露する

十七音字という小皿に盛り過ぎて、こぼれ  
出してしまった。省略の妙技を考えて見よう。  
(遠のいた足新緑が呼び戻し)

地元で稼ぎ遠出で蒔いて行く  
(農協の積立で遠出を思い立ち)

原句のままでもよいのだが、原句に関連し  
て浮んで来る句の参考と思われたし。  
遠廻しに妬いて微動だにせず

句の表現は、その句材によって一見固苦し  
そうに叙して効果的な場合と、ソフトムード  
に叙して効果的な場合がある。

(遠廻しに妬いたが感度零だった)  
なまくらか夢のみすずきか縁遠く

と、黒地のきものに裏地は茶色だった。つ  
まり花札の黒と茶の保護色である。勝つため  
にするバクチだから「卑怯」な手も時には使  
ったものだ。ぼく流に云わせると技術であ  
る。こんなぼくをぼく自身こわくなり、敗戦  
を記念して賭けごとはやめることにした。

(西日本新聞「現代の川柳」暮らしの百面相」  
一八三回からパチンコの句をご紹介する)  
―妻子からいま放たれてパチンコ屋

田 口 麦 彦

パチンコの材料はもともと、玉がはい  
るとアメ玉やキャラメルが出る仕掛けの、こ  
も相手のおもちゃだった。

これを終戦後におとなの遊戯用に改善した  
のは、名古屋の正村という、この種の機械の  
メーカー。初めは路上や縁日にお目見えとい  
うていどだったが、しだいに人気が出て、つ

この調子が、リズムカルな表現だよ。  
原句と私が表現した句との意味が違っている  
ものが多々あるが、それ等は総て、作句の参  
考資料だと解釈されて、自分の句の方が優れ  
ていると思ったら凱歌を挙げて欲しい。

この教室の祈りながら、それぞれ好作家にな  
られることを祈りながら、私はささやかなお  
手伝いをしていっているつもりでいる。

題―耐―六月二十日締切(八月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井三五二七七一  
本 田 恵二朗

ぎつぎに専門店が生まれた。  
このパチンコ店は現在、名古屋を中心にし  
た愛知県にいちばん多い。さすが発祥の地、  
というところか。

―パチンコで千円ばかり成り上がり  
小 池 鯉 生

店のかずからみたパチンコの全盛期は、昭  
和二十六年から二十九年までの四年間。全国  
で二万店を越えた。翌三十年に一万店をこそ  
こへとガタ落ち。しかし、その後もずっと一  
万店前後がつづいていよう。熱心な愛好者が多  
数いるからなのだろう。  
―パチンコの症状顔がゆがんでる

―パチンコ屋玉も女も狭く住む  
須 崎 豆 秋  
岸 本 水 府  
小 泉 戸 牟

大萬川柳

「家」

入選発表

選者 川村好郎

投句総数 六百七十五句  
入選 七十五句

松江 富喜子

米子 千代

大坂 十止庵

笠岡 遠二

笠岡 桃里

香川 酔夢

香川 静馬

羽曳野 可動

松原 史好

大坂 弘生

鳥根 潮音

下関 木石

下関 木石

三界に家なき女房に敷かれ

大坂 野迷路

八人目の敵家で待つ千鳥足

堺 ひろ子

家付きが魅力敷かれる気で貰い

大坂 智子

百万ドルの夜景の中のわが家の灯

倉敷 素身郎

新築をしてもやっぱり午前様

大坂 一栄

退職金だけでは理想に遠い家

倉敷 翁童

建て売りへわなををしかり待つ業者

堺 藤持

大坂 シゲ  
建て売りの広告よい事づくめなり

西宮 百酒

アンテナは立つが国旗は立たぬ家

鳥取 豊生

路地裏に助け合ってる家並ぶ

倉敷 扇水

家柄の良さに疲れ切る喪服

大坂 章雅

持ち家を朽ちるにまかせ過疎守

倉敷 春日

亡き父母に見せてあげたい新普請

鳥取 洋々

増築の半ばで資金が底をつき

大坂 万里

日照権でまた採めそうに家が建ち

大坂 芳子

人間の弱き家相にまどわされ

鳥根 芳子

転げ込むようだの家賃うらやまれ  
背伸びして今日をほぐしても我が家  
大坂 清女

はるばると生家の温もり抱きにも  
黒光る旧家の柱にある歴史

尼崎 利美

だらしな家と知ってる御用聞き  
問題は家結婚にふみ切れず

大坂 君子

火の車と思えぬ家の門構え  
妻の城僕には港にすぎぬ家

笠岡 忠三

白壁の家に時世の浮き沈み  
聞き合わせついでに家の構えも見

倉敷 里風

土地買った家を建てたと姦しい  
庭もなし山も見えぬが俺の家

橋本 木魚

建て売りの頭金から借る手段  
通勤の窓から欲しいあんな家

大坂 修史

鍵ッ子に隣の家の灯が温い  
三界に女家あり昼寝する

因習の格式本家分家の順

藤井寺 吸江

出直しの決意故郷に家があり  
やっそこさ余命を過ごす家が建ち

新築の披露トイレも開けて見せ  
家のこと気になり出したなま返事  
家建ててローン残して先立たれ

寝に帰るだけには家賃高いこと

東大阪 弥生

敗北を胸に包んで家で開け

和歌山 大茂津

男手のない家にある男下駄

地ノ句

大阪 修史

寝に帰るだけに女生花生ける

2DK心豊かな借家です

大阪 修史

佳句

天ノ句

和歌山 葵水

新築の家並み値踏みする散歩

パンのひとつひとつの灯のドラマ

和歌山 葵水

借家から抜け出るプランばかり

過疎守る軒へ今年も来たつばめ

和歌山 葵水

核家族つどう団地の灯が明かい

選者吟

和歌山 葵水

配置又替えてわが家に心足る

昭和三十七年度

和歌山 葵水

働いた靴音になるわが家の灯

ベストテン(四月現在)

和歌山 葵水

### 川柳塔社常任理事会(5月4日)

議題は六月十七・八日の木曽路の旅、七月の路郎忌句会など。

路郎忌は七月七日(金)午後六時、ホームランド以和貴荘の予定である。

古方氏の手書き句集は注文殺倒、文字どおりうれしい悲鳴。古方氏によほど頑張っていたらかないと追っつけなくなる。

出席―古方・柳志・薫風・葉・多久志(前月も出席)・生々庵・小松園・一三夫諸氏。

▼若本多久志副理事長NHKテレビに出演。

四月二十二日朝NHKテレビ一〇二の「左きき」に出演。左の筆書きなどを披露され好

評だった。多久志氏は阪神左きき友の会支部長でもある。

▼大矢十郎氏(和歌山同人)の主宰する「川柳しんぐう吟社」の機関誌「みかん」の題字は第六号から生々庵主幹筆になる。

▼川柳よしなが創刊。五月一日発行で「川柳よしなが」が吉永川柳社から横山一声氏(岡山同人)同社代表のもとに誕生。

▼市岡暁舟氏と、田中万里歩氏(ハワイ元同人)がこのほど帰日、いや来日され、万里歩氏は五月上旬にハワイへ帰えられたが、暁舟氏ご夫妻は六月中旬まで滞在される。なお暁舟氏は五月七日に本社へお元気な顔を見せられ、渡米される生々庵・小石主幹ご夫妻と歓

談、そこへ旧知の若本多久志氏も駆けつけ、短かい時間だったが柳縁のあたたかさは永遠であろう。編集部の一三夫と葉子が地下鉄心齋橋駅まで送る。阪和線羽衣駅付近の宿泊地へ雨の中を帰えられた。

▼尼緑の助句碑建立「灯台の夕陽、神話を抱きよせる」の協賛寄金は好調に進行。一口五百円(幾口でも可)この送金先は〒693出雲市若葉町、野村神月宛。(振替口座松江八九四四。一応六月末日でまとめる由)

▼堺・若芽合同句会・六月四日橿原神宮駅前九時集合。新緑の飛鳥めぐり。

▼八木摩太郎氏(堺同人)は「観光さかい」に曾我廼家五郎を執筆好評だった。

四	英代	七、五	呉	二一	一三	五、〇	堺
五	美代	六、五	富田林	二一	一三	五、〇	神戸
六	水客	六、五	大阪	二二	一三	五、〇	和歌山
七	筒子	六、五	倉敷	二三	一三	五、〇	羽曳野
八	醉夢	六、〇	香川	二四	一三	五、〇	大阪
九	重水	六、〇	大阪	二五	一三	五、〇	堺
十	梁人	六、〇	倉敷				以下略
十一	天笑	六、〇	堺				昭和三十七年度 第七回
十二	修史	六、〇	大阪				「環境」 五句以内
十三	瑞枝	六、〇	米子				締切 六月二十日
十四	智司	五、五	大阪				第八回
十五	木魚	五、〇	橋本				「鈍行」 五句以内
十六	翁童	五、〇	倉敷				締切 七月二十日
十七	比呂路	五、〇	大阪				投句先
十八	智栄	五、〇	大阪				大阪市南区鰻谷仲之町二〇
十九	智子	五、〇	大阪				川柳塔社内 大萬川柳係

# ・柳界展望・

橋高薫風担当



高根観桜川柳大会・左から栗・百酒・通見・鶴丸諸氏(天笑氏写)

▼中島生々庵主幹は五月十二日小石夫人を同伴、二週間の予定で渡米の途につかれた。ロスアンゼルス、ホノルルで在米柳人諸氏と交歓される。

▼川柳東京四月号は富士野

鞍馬喜寿祝賀会特集号として発行「いっしょに女房の好きなものが好き」鞍馬川柳「奈加川」発刊五周年記念川柳大会は六月十八日(日)正午から名古屋市中山区大平通り松葉公園内の中川図書館で開催、兼題五月雨・自慢・榮える・つばめ・氣流・誇り、各題三句、投句は百円同封の上、名古屋市中川区八幡町の十一、加藤彩華方中川区川柳作家連盟宛。

▼榎田竹林・柳葉女夫妻の句集(続刊)が今秋出版される。大いに期待される。

▼第八回大陸川柳作家同窓会は九月二十三日、二十四日(連休)の両日、三朝温泉鳥取砂丘を中心に山陰松島、円護寺、二十世紀梨狩りなどのコースで開催される。兼題、周恩来首相・玄海灘・にら・馬車・万里の長城・アリアン峠・朝鮮人・参・大連・駐屯部隊・川柳との国交回復、観光川柳(秀句に呈賞)の題は、鳥取砂丘・梨・三朝温泉・和紙・各題二句、連絡は、姫路市北条二五〇鉄宿四〇大井正夫へ。

▼第二十回蟹の目社川柳大会は五月七日(日)午前十時から金沢カトリック教会文化センターで開催、本社の同人伊藤泰弘氏が兼題の選を担当された。

▼第十六回岩手県川柳大会は六月二十五日(日)午前十時から北上市民会館で開催される。兼題、触れる・二三枚・凝視・根氣・遙か・年中無休・どんと来い・頑張る・年輪、各題二句、投句は二百円同封して六月二十日までに岩手県北上市本通り二川柳北上吟社宛。

▼第八回埼玉川柳大会は七月三十日(日)午前十時から県立労働会館大講堂で開催、兼題、その上・皮・どっちもどっち・今日の夢・取つぶし・お蔭さま・冷やす・味つけ(一句吐)、各題二句、投句は、(三種)つけ以外の題)縦二十三横三種の句箋に表に作品、裏に題名を明記、無記名で、七月十五日までに埼玉県浦和市長常盤九の十四の六武藤かめ吉方埼玉川柳大会事務局宛。投句料三百円。

▼第十回全伯川柳大会は七月十日午前八時半から日毎日新聞社大サロンで開催される。自由吟三句、課題吟「ブラジル独立百五十年に因んだもの」一句、投句料三百円、締切りは六月十五日着、送句先は日伯毎日新聞社。DIARIO NIPPON NEWS PAK. Ruada Gloris. 332-Sao Paulo

▼岡山県護国神社献句祭は五月十四日(日)午後一時から岡山市護国神社で開催、本社同人の本田恵二郎氏が兼題の選を担当された。

▼大神古梅句碑除幕式、句集「匂」発刊記念祝賀川柳大会は五月十五日(月)午前十時から因鉄王寺駅前と王寺公民館で、それぞれ挙行開催された。

▼弓削川柳社は平安川柳社創立十五周年記念川柳大会に出席を兼ねて、親睦旅行を計画、五月二十日は大津の「おおみ荘」で宿泊された。

▼石丸弥平ごだやら人生出版記念句会は五月五日午後一時から東京京橋区民会館で開催。

▼志水剣人編現代川柳類題別高点句集が蒼海出版から発行になった。全国柳誌約二千冊から題詠の高点句三句を選び一万二千五百句を集録したもので、B六判横装形六百四十頁、定価千三百円送料百十円、申込みは横

浜市南区井土ヶ谷中町一〇七川柳黒潮吟社へ。貝の渦生きながらえるむずかし、与呂志、亡き人と語り合いつつ貝拾う形水、貝にたいや右にも左にも倦いて古方、などが掲載の一例

▼句集「なら」が奈良県川柳大会四十回記念事業として四月一日奈良市役所内の奈良県川柳連盟から発行された。奈良にある五つの柳誌の会員、奈良県在住の柳人百八十五人が五月ずつ持ち寄ったもので柳人の心の触れ合いの感じられる好著であり、今後の継続が期待される。定価三百円、送料七十円、申込みは奈良市北市中町七一杉野睦朗宛。本社同人の句は、「停年のない仕事場をさげすまいる」若本雀踊子「母さながら」岩干の色黒合「宮口笛生」秋風を尼僧の胸で受けとめる「村上春巳」

▼木下愛日句集「愛日」が四月一日京都市伏見区深草西出町六九木下方から発行になった。集録の句は九百六十句、妹と歩く兵隊屋一つ、昼からの雨千人の女一員、夕ぐれを人にわかれて人に会う、など感覚的に秀れた句が著者の本領とも

見えるが「心配のあたりに天は落ちて来ず。一すき焼の音すまじくかきぬ也。」などの傾向にも甚だ鋭いものがあり、前書のある句の多いのも著者の心の敷きを思わせられる。昭和川柳一時期の好作家の句集として一読をおすすめする。定価七百円。

▼矢形溪山著句文集「揚げ羽蝶」が米寿記念としてこのほど発刊。著者は八十八歳。シカゴ川柳吟社主幹、ポストン文芸誌主幹など歴任、北米柳界は米四十年の実生活から得たものである。生かされる今日へ合掌あるばかり。溪山。―山菜と地酒で足りる内祝い―幽香夫人。なお表紙装幀は岡山同人岡村久志良氏。送料共五百円。発行所岡山市津島

## 新同人紹介

二五四一、川柳岡山社。▼心の会主催、倉敷市文化連盟、川柳塔社、川柳道場。後援、「色紙習作展」は五月六日七日の両日、倉敷市本町の文化センター展示場で開催され、七十点近くの川柳と柳画の力作は鑑賞者に感銘を与えた。本社同人水粉千翁氏が指導をされて

いる。▼川柳たましま年祝八人句会（鼓草・秀子・林鶴・扇水・朝二・千翁・梁水・満典）は三月二十六日良寛荘で開かれ、ゲストの灯竿、恵二朗両氏ともども喜びに浸られた。当日の句会報は特別祝意に満ちたものが発行された。▼岡田甫氏（鎌倉市）は、三月二十四日「川柳東海道（下）」の取材に大阪さ道頓堀で十一時頃まで飲ま

れたそうだが、川柳家とは会わずじまいだったとのこと。▼堀口塊人氏（西宮市）は大坂の大手前病院での二度にわたる手術と、医療担当者の尽力で難病を克服、百二十五日目の四月十一日退院、自宅で静養を続けられる。

▼八木摩太郎氏（堺市同人）は四月二十一日から四日間四国巡洋に参加、満願の心境を、「もう一度回って来た八十八」の句に寄せられた。▼弘津柳慶氏（岩国同人）は専売公社出張所長として在任三年半、この度郷里の岩国市へ栄転され、川柳いずも会員の歓送を得て赴任された。

は四月はじめ、志摩半島へ視察の旅を持たれた。「人間」と野鳥と草花と住む平和」と▼本庄金三氏（大坂市同人）は四月三日ご長男結婚のため家族連れで徳山へ。秋芳洞を見物された。秋芳洞。「お土産の石が重たい秋芳洞」

▼吉岡通児氏（松江市同人）は四月六・七日は全国郵政川柳人連盟の中国ブロック大会が下関であり兼題選者として出席。▼羽原静歩氏（守口市同人）のご子息泰夫氏は大窪奈津子さんと良縁ととのい、三月三十日守口市民会館で華燭の典を挙げられた。▼堀江正朗氏（島根県同人）は四月四日二男俊夫氏の税務大学入学式へ出席のため広島へ。▼川上久司氏（新宮市）と大矢二郎氏（新宮市同人）の長女富子さんと結婚は五月号既報の通りだが、四月五日新婚旅行に四国へ。

▼新川博也氏（岸和田市）は三月二十三日付で税理士として登録をされ、大阪市交通局協力会に勤務のかたわら経理・税務の仕事もされることになった。

▼南海川柳会―六月十五日―題・複線・とげ・ボウリング。会場―南海電鉄本社食堂内。▼南大阪川柳会―六月二十日（火）午後六時から題―真ん中・いじわる・郊外・薄着、会場―松崎町二丁目以和貴荘。▼川柳東大阪―六月二十四日（土）午後六時から―題居心地・ブーム・あなた、港。会場―近鉄永和駅前、東大阪市民会館二階。

米 田 之 保

―好郎・小松園推薦

黒 田 真 砂

―好郎・小松園推薦

▼大江秋月氏（兵庫県同人）は大鉄局の第二十五回大鉄年度賞川柳部二等の榮譽に輝き、三月二十一日、局の会議室の受賞式に臨まれた。賞状の文句月並みだが嬉し。

▼清水一保氏（鳥取県同人）

▼新川博也氏（岸和田市）は三月二十三日付で税理士として登録をされ、大阪市交通局協力会に勤務のかたわら経理・税務の仕事もされることになった。

# 本社五月句会

会場 以和貴荘  
八日 午後六時

五月句会といえは連休づかれて不振が通り相場になつていたが、まあまあの出足で句会幹事はホツとする。

西屋萊副主幹が登壇。司会の柳安子氏と持ち時間のやりとりしながらの柳話で、ハンドルの切りかえもあつて、前半は川柳、後半は西山記者の秘密漏えい事件。

他社者の句会で勉強することもいいが、句が荒れるとあつて、初心時代はあまり他流試合をすすめなかつた路郎先生の教訓。これらを氏独自の解釈で語られた。

月間賞杯は中島生々庵主幹がにぎられ、場の拍手がひとときわ大きくひびいた。

(河井庸佑整理)

出席 与呂志・古方・滋雀・新之助・萬榮  
・美房・花梢・文秋・儀一・摩天郎・生々庵  
・柳志・維久子・一三夫・瓢太・水京・肖二  
・牧人・葛城・圭井堂・静馬・好郎・誓二  
・太茂津・葵水・多久志・静歩・美代・好一  
・芳川・祐司・六龍子・悦郎・南柳・柳信・三  
・十四・野迷路・綾女・敏一・二二三・柳宏子  
・竹莊・重人・いさむ・酔々・岳人・河産・吸  
・江・克美・宣介・凡九郎・頂留子・小松園  
・庸佑・笑笑・静香・智子・栞・季賛・つき子  
・金三・鬼遊・君子・薫風・あいき・葉子。

## 席題「カメラ」

岡橋 宣介選

嫁ぐ日の兄のカメラがよく動き赤ちゃんを撮すカメラに道化役美人より撮さぬカメラ 持っているカメラアツク客席に居たと教えられピンボケをカメラのせいにして笑い上達をしたらカメラ 買ひ替える横綱が負けるところを待つカメラアベックにたのきシャッター押とハネムーン代りばんこに撮るカメラ新婚のカメラ 同じ所で二枚撮り念のため撮る一枚の向きを変え妻ばかり撮つて戻つたハネムーン起訴になるまではカメラにそりかも外国へやっぱり 持つて行くカメラ梅林のカメラ 香りもいれて撮り撮される視野へ何げない ポーズ再婚の話 をカメラ 写ししてる酒のめぬ人が持つていいカメラ黒い堅いカメラを女もてあそび鼻染正しければシャッターチャンス失な

## 席題「秘密」

金泉 萬榮選

還厩に祝う夫婦にまだ秘密善意の秘密と病人既に知り調合の秘訣あつさり盗まれる秘密もう隠しきれない 秘書の顔内ボケウ 右か左かもつ秘密 輪をかくしてネオンの影に生子には子のつき合いとしてある秘密公然の秘密を妻に未だ呆れご指名をされて秘密を皆しやべりロッカーの奥へ極秘という書類

あけつぱな秘密の話の底にある秘密刑事も秘密見つけたように笑み子の秘密 知つて人形 語らない娘の秘密 そつとのぞけば美顔水秘密 などおまへん年中 兼ねる秘密 明かされて 答を出し 兼ねる社の秘密 もう新米が知つて いる過去の秘密 女の方から 打明けるパパだけが秘密 守つて 孤立する秘密 持つ 手かも知れない 掌を握る秘密 持つ 手かも知れない 顔のお人好し まだ元氣 あるから秘密 持つて ます子に 残す 秘密は 持たぬ 貯金高ヒロインの過去 ぶしく 職業 識せず公然の秘密 見抜いた母の 問いきびししゃべりたい 秘めても居たい つや話言いそびれた 秘密 金婚まで つつき秘密 うちあけて 愛に かけて みる秘密 など であろう はず ない 床並ぶ入院のことは 秘密 にして 気楽

## 席題「財布」

笠原 吸江選

末っ娘は我が家の財布 考えず老婆に財布を見せる あはらしさ買い替えてみたがよく出る財布 なり中味見て スリも不景や と思ひめいめいに財布 覗いて から メニュー財布 布まで 見せて 上手に 買うて みる拾う前財布 一度程 けなき 旅である財布は 妻に 財布は たい 飲む 気ワニ皮の財布 五円の つりを 待ち

宣介 一二三

醉々 敏 静歩 維久子 維久子 竹莊 柳信 悦郎 醉々 天笑 悦郎 花梢 綾女 頂留子 美代 花梢 花二 誓二 萬榮









▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。金井文秋担当

川柳東大阪

竹中肖二報

阿倍野から通天閣は低く見え喜風  
西成で飲んで阿倍野でくだを巻き湖風  
国鉄へ半分貸した阿倍野橋鬼遊  
カマトトも泳いでいます阿倍野筋葵水  
モーニング阿倍野で寒い風に佇ち新之助  
ひら飯名であべの川書いて孫の文一栄  
塗りたてのペンキを足に猫帰える綾女  
画くよりも塗りたくってる特等賞柳宏子  
塗りつぶすのは負だけの僕の過去凡九郎  
健康によい縄とびがてれくさい文秋  
籠の鳥飛べぬ世界に住み馴れる誓二  
飛ぶ鳥を落した武家のガラス拭く酔楽  
吹けば飛びそうビルのガラス拭く酔楽  
週刊誌スターの秘密すっぱ抜き肖二  
もう着れぬ育ち盛りへ母悲鳴頂留子  
目覚しに暫らく縮む冬の朝鎮彦  
スカートは丈はどこまで縮むのか三十四  
指切りをして園児にもある秘密思月  
浴槽のガラス裸体のシルエット悦郎  
伸び縮みせぬ机子の氣に入らず儀一

どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

病院の廊下が長い胸さわぎ吸江  
エレベーターみんな出口の方を向き比呂路  
記憶喪失男はそんな貌をする鬼遊  
本当の事云うていて胸さわぎ悦郎  
エレベーター未だ八階の針の位置酔々  
あいまいな記憶で女背をむける弥生  
胸さわぎ終った頃に来るしらせ之保  
まだ苦い記憶逢うてはならぬ女つき子  
土堤長くつづく遠い日の記憶史好  
へそくりの額が記憶と合わぬ残岳一  
バーゲンへ急ぐ女とエレベーター孝子  
この柄の記憶も解いて洗張り儀一  
胸さわぎ女が時計をみて歩き孝子  
胸さわぎ追打ちかけて鳴る電話修史  
年寄りの記憶ひもとく掘りこたつ敏雄  
憎んでも猫は足元じゃれて来る喜風  
胸さわぎする宵からの稲光り薫郎  
アルパムの彼女に残るある記憶好郎  
どんぐり川柳会 (羽曳野市) 川村好郎報

まるべに川柳会 (大阪市) 村田瓢太郎

日雇いが働いている花吹雪節斗  
あみ棚に傘を忘れて春の旅星斗  
見なれないすいがらもあり春の宵貞  
好きな人の笑顔に会った日の平和一  
機嫌計つくってほしい社長室好郎  
嫉妬もういけずに変わる器量負け  
同窓会いけずな子ほどなつかしく  
顔がよく見える鏡を選んどき美枝子  
幾たびかどまってるみた長い道寿子  
快復のよい間だけ孫を借り慶子  
ご機嫌の身間だけ孫を借り慶子  
あすなる川柳会 (大阪市) 山本素郎報  
一日のピリオド無心の手を洗うゆきを  
しようことにアベックの火を借る好郎  
赤い旗立てて誰も居ない道酔々  
辞めてから重役候補とおだてられ百酒  
チューリップの芽も知ってどお水取青香  
気苦勞をぬるいしまい風呂でとり恵美子  
肩書できるあいだは子も素直ひろし  
人生のでこぼこ酒でまぎらわせ素郎  
どんぐり川柳会 (大阪市) 谷垣史好報  
長いものに巻かれ半生くたびれる吸江  
徒食して電話帳に名を連ね修史  
とつときも吐き出し敗者隅にいる弥生  
いたわってとらせの見得で幕が切れ鬼歩  
半生を共に歩いた足をもむ鬼遊  
五十音貧富別ない電話帳喜風  
地下街の隅に疲れた電話帳酔々  
電話帳の上に十円置いて去に小松園  
お好焼の香いがしてる電話帳好郎

電話帳がずっしり重い 病み上り 史好  
 とつときの金でプライド救われる 河産  
 とつときの預金に不安のあるデノミ 悦郎  
 半生を妻の知恵にて生きている 比呂路  
 有難やとつとき親友なればこそ 儀一  
 電話帳広告のわりに小さな店之保  
 小さくて薄くて僕の電話帳 岳人  
 半生を海へ潜って僕の電話帳 岳人  
 血と汗の半生語る茶の間の灯 真砂  
 電話帳太るわが社は不甲斐なし 薫風  
 富田林夜桜句会 板尾岳人報

肝心なところを時計へ目をそらせ 天笑  
 朝寝にはかわりなしに鳴る時計 百酒  
 帯を解く女に時計進むなり 岳人  
 死後二日時計の針は動いてた 美代  
 夜桜へ街の時計は刻打たず 薫風  
 ええ時計持っても遅刻する男 天笑  
 川柳さやま 河原みのる報  
 一円はいつても財布のお留守番 近次郎  
 一円の違算で銀行灯をともし 政二郎  
 金貸しのソロバン一円までとはじき 雅佐女  
 一円の価値明治だけそっと知る 八陣  
 拌み石一円玉が風に乘る 拓  
 手袋を脱いで握った手の強さ 康子  
 うつり香の手袋ぐつと頬にあて 素水  
 新郎の喜び手袋が知っている 指月

### 雅号ぶっちゃけばなし(69)

みずえ



林 瑞枝

はやし

私はまだ雅号もなく、両親のくれた本名で通しております。瑞枝という名は、耳へ可愛らしい響きを持たないので小学生の頃はとても不服に思っております。女学校へ入学した際、若いハンサムな教頭先生が「君の瑞枝という名前が大変気に入ったので、今度生まれた僕の赤ん坊へ瑞枝と命名したよ」とおっしゃった。それ以来「瑞枝」という名へ満足するようになりました。

かつて菊田一夫の美少年を思わせるような美人という小説のヒロインも瑞枝だったし、小学校時代のわが初恋の君も「ミミイ」とよんで、よく毬投げのお相手をしてもらった思い出もあります。

(主婦 四十五歳)

### 堺・若芽合同句会(堺市) 吉岡清香報

軍手売る 瞳いくさの かげはなし 清香  
 工事場は 軍手のままの コップ酒 とおる  
 手袋に 表情があり バスの旅 ゆきお  
 手袋が 死体となった 霜柱 可住  
 軍手は めて働く 男の声になる 英断  
 軍手は めて働く 男の声になる 英断  
 株下落 トントン 拍子の角が折れ 春峰  
 縁談の トントン 拍子も 気にかかり 蕪石  
 トントン 拍子一姫二郎マイホーム 百合子  
 恋の春 トントン 拍子の弾みならず 無聖  
 ローカー紙活字ミスなど気がならず 実路  
 天アラを 包んだ 活字裏へ 抜け 初音  
 大小の 事件 活字の 号が 決め 竹堂  
 ボクの名が 活字になって 他人めき みのる  
 失言も 活字となれば 動かせず をさむ  
 緋ほど 活字は かすむ物思い 掬水  
 切り 抜き帳 活字となった 孫の詩 よしの

七世紀の文化のかおりに 発掘し 維久子  
 掘り出した瓦礫のあとにヒルが 建ち 柳影  
 発掘の古墳は 押すな泥の 泥こみち 摩天郎  
 酒好きな 男と 知らずくど かれる 慶之助  
 好一對 皆んな 思って 添うた 仲 清女  
 好きと云う ただ一言が 寝むらせず 宏子  
 どん底に いて 友情の手が まぶい 誓二  
 友なれば こそその 情が 身に しみる 儀一  
 落ちなれば から 友情の 尊くて 天笑  
 友情が 二度目の 無心突張 ねる 天笑  
 仏前に 話し かけてる 俺・貴様 青香  
 偶然を 大事に してるのも 女 つき子  
 見ってしまった 人妻の 足の 裏 夢成  
 その 低い 腰で 天下を ねらってる 葵水

党利党略次への低い速記録 たつお  
細い道何処へ逃げるか追われる身 藤持  
細長く生きる人生に交通禍 柳信  
心細い日々にか家計の残がさせ 一二三  
構想へ鉛筆の芯とがらせる 笑痴  
ヒロイズム神経細い子に育ち 好郎  
川柳わかやま 垂井葵水報

厚化粧しくて女のドラマ浮き 富子  
童心でくすぐり出した母性愛 春亭  
子の玩具選んでる目は澄んでる 弘生  
童心を見せた笑顔の表彰台 義広  
ママごとの童心にもう右派と左派 十郎  
童話読む祖母は童話の中にいる 智  
寡婦として釘打つことも手なれけり 里美  
童心に還る六十路のボウリング 佳宵  
戸じまりも釘一本ですむ暮らし 照代  
ふくまれて釘順番を待っている 千枝子  
パチンコの釘が本日味方する 酔々  
お世辞を煎じてみればどれも欲 悦郎  
ベテランのマダムお世辞も生きて ふうよ  
お世辞言う腰の動きと手の動き 佐一郎  
お世辞ではながとお世辞だけを云い 久司  
お世辞だと知って乗せられ奢られ 延伊知  
お世辞と知りつつソツとコンバクト 俊  
世辞ひとつ言えず心にひそむ愛 千寿子  
ぶ厚い便りだった一行貸してくれ 天笑  
童心のひたむき積木あとひとつ 葵水  
チャンバラの相手で足切も嗣切られ 太茂津  
無器用に打たれて釘は横に寝る 増蔵  
嫉妬心女お世辞に秘めている 好郎  
童心にかえる竹馬歩るかれず 風

賞状のかけでさびしい釘であり 純滋  
灯よ戻れわが初恋のころの彩 としよ  
ライバルの影絵が射程距離にある 千代香  
茶柱があざけるように立っている 柳宏子  
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報  
ためらうて自動踏切待つ 無難消涼  
急用へ自動踏切降りたまま 天笑  
自動踏切走りぬけても せかぬ用 圭水  
自動踏切くぐる スリルを叱りつけ 宏子  
駅寄りの自動踏切人が混み 金三  
自動踏切人間疎外の道となる 誓二  
自動踏切まがった母の腰に降り 摩太郎  
村雨に自動踏切待ったなし 儀一  
自動踏切足踏して 駆けくらし 和郎

駒つなぎ川柳会 岸南柳報  
退院の車曲るまで見送られ 潔  
退院の日からこまめに働く人 恭太  
退院の話も消えて春になり はやを  
退院の子供についた甘えぐせ 河太郎  
退院をして外来と名がvari 眉水  
明るさが我が家に 退院日 誓二  
気休めの退院とも知らず内祝 育園  
退院を待っていました 速捕状 順三  
退院へ僕のマスコットをゆずり 香豊  
お彼岸の傘が触れ合う天王寺 多津緒  
春めがけ新幹線が店開き 悟郎  
お出かけの鏡の中も春の顔 一点子  
退院と聞いて里から母と孫 南柳  
ゆい言迄した退院を冷やかされ 美代  
入院がつかえてますとほり出され 儀一  
エプロンの妻美しい退院日 柳信

家中のあかりがついて父退院 金三  
退院の廊下で恋と逢って来る 岳人  
退院によろしおしたと義理の仲 摩天郎  
しみじみと明日退院のベッド無で 宏子  
退院の煤けた羽羽鶴振り返り 小松園  
和歌山七面句会 中筋三幸報  
駅前に出てから他人の顔になり 淳子  
駅前に住んで時々乗り遅れ 富子  
駅前で訣れましようと言う科目 其夕  
ひょうきんな顔で振りむく鶏の首 陽一  
人間の臍を切った里への春彼岸 芳治  
臍の緒を切った里への春彼岸 芳治  
人間に臍あり母の顔が彼り 光童  
卵産む機械と古里父母は亡く 政夫  
鶏鳴を聞きし古里父母は亡く 勇次  
鶏に電気をあたえねむらせず 紅梅  
鶏舎から出したとたんのラブシーン 城石  
鶏舎より首だけ出しているトサカ 昭伸  
入学の子と駅前のそばを食い 三幸

川柳大阪 児島与呂志報  
古傷を思い出させる人と会い 茂坊  
こんなとこに香水の香り裏長屋 金太  
病床の妻にたずねる水仕事 天守  
泣いた顔エプロンやさしく包み込み 秀夫  
ひらがなの便り楽しい母の味 兔月  
どん底の生活へ強い子が育ち 雅果  
香水の女同士を振りむかせ 力泉  
嘘がばれそう故郷遠ざける 小星  
影のある女香水の尾をひいて 漁人  
散り落ちる椿が消した冬の音 重人  
冬の使者丹頂鶴の声は冴え 秀峰  
平凡でよしエプロンの匂う妻 洛醉

美しい嘘を包んだ派手な服  
大物の約束だから トップ記事  
朝市を抜けたら冬の海が見え  
みやげ物ちよっと素朴な味を知り  
五年目の約束 課長の 髭で来る  
エプロンの 白さを女垣にする  
冬の次春がある から ええのんや  
土産よりそえた一と言喜ばれ  
恋人が 変り香水替えてみる  
香水もピツタリやめて 妻の位置  
冬越してこそ美しい花も咲き  
閉ざされた球根栄養とって冬に堪え  
発車ベル かけ足だけを 乗せて行き  
若き日の 記念写真の 髪黒し  
泥水に染まるまい 染まるまい日々

徹舟 本陸棒 胡蝶 みのる 凡々 笑風 敏  
城北明朗会 川口弘生報  
雪景色 恋しい 暮しも 幸の うち 繁子  
雪先へ 粉雪チラチラ 邪魔をいれ 三十四  
雪のない 正月 スキー 邪魔になり 進  
心にも 塵一つ ない雪の 朝 準 人  
雪便り 聞いて スキーの 手人 をし 賛 平  
公害の 町を見 帰った 黒い雪 濁 水  
正月を 迎えて 山も 雪化粧 秀 村  
明け方 からの 雪病人に 教えられ 春 果  
住も 足も 口も 値上げの 波の 波 ます 系  
ナツメロを 聞きつつ 炬燵で 居眠りし シ げ  
新年の 計に 鼠をとる 話 弘 生  
たけはら川柳会  
妻にない 良さを 意識した ピンチ 扇 水  
柿青く 狂女に 記憶 戻らない いろは

雅号ぶっちゃけばなし(97)



八木 千代

長男を大学に入れて、はじめて子を離し  
た生活、立って居られないほどつらで、  
淋しくて、そんなとき川柳を知りました。道案内が林  
泉甫さん(林瑞枝さんのお母さん)でした。すずめら  
れて、さて新聞柳壇に投句することになって、取敢え  
ず身近な人からお借りしよう、また良い雅号をあとで  
考えようと母の名の千代を借り、その後「千代さん」  
と呼ばれ、そのまま、変える機会もなく今日に至りま  
した。手紙が来ると、さてどちらの千代なのか、一応  
私が開封して、区分していますが、お寺のお会式の案  
内やら、敬老会の通知も頂き有難いことです。信心深  
いおばあちゃんになれることでしょう。本名は信子で  
す。

(主婦 四十八歳)

憂き事も 小鯛が釣れて 忘れさせ  
重文を そうかいなあと 観て 通り  
この人に 頼るほかなき 愚に 耐える  
しまい湯へ 女ごころを 泳がせる  
暮らして 疲れたように バッタの 死  
運転免許 恋したころに とりました  
核つむ 法衣 復帰は 許すまじ  
ご期待に こたえて 二本 歯がのぞき  
シブレット せめて 憂さを 晴らしたり  
アルパムの 母の 面影 赤茶けて  
靴音の たしかに ビッコ 父帰る  
募金箱へ ポンと 入れるも 旅のこと  
太らせて 射つとは むごい 狼解禁  
離れない 距離へ あなたを おいてみる  
ブライドに 掴まり やつと 耐えている  
ピアノ 買うつもりへ 急ぐ 金が要り  
わが家 笑い 消えた ドル ショック  
孤独ではない Gパンの ひとり 旅  
さっそうと 美女よけるなり 募金箱  
まぶしさの中にあこがれの 人は 住み  
人生の 旅 終り たり 枯す すき  
太陽は ひとつ 愛する 女 ひとり  
名刺出す までは 下座で ほとと かれ  
それからの 歩中は ふし目が ちとなり  
一年の 計 ねり 直す 十二月 静水  
生活の 知恵 バランスを 崩さない 天石庵  
南大阪川柳会(以下次号へ) 金井文秋報  
老婆の 寝顔に わびること 多し 花 梢  
国 資へ 集める 鹿の 頭 数 柳 志  
老婆の 配慮へ 頑固な 僕が 負け 金 三

▼ご通報は読者諸氏優先にしてください。

# 暑中広告受付!

本誌五分の一段が千円です  
グループをおもちの方も  
ご利用ください。

★原稿締切・六月末日

あなたもぜひ一口

★西出一栄著

「ねっくれす」

六〇〇円

★阿万万的・松川杜の共著

「的」

四五〇円

★西尾 葵著

「水鶏笛」

六五〇円

★若本多久志著

「古いの坂」

五六〇円  
以上送料共

この寸法が二百円

川柳塔社

振替口座大阪  
三三三六八番

## 本社六月句会

日時 六月六日(火) 午後六時  
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目  
電話 622・1275番

兼題 柳 父 話  
「」「」「」  
席題 三題 当日発表  
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

若本多久志  
児島与呂志  
西田柳宏風志  
橘高薰子選  
菊沢小松園選

各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区巖谷仲之町20

川柳塔社

7月の兼題 「旅人」 「ヒント」 「優越感」 「肌」

### 八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葵 選

近作柳構 (10句) 菊沢 小松園 選

課題吟 (各題5句以内)

「温 泉」 渡辺 乱坊 選

「自 信」 谷垣 史好 選

「ビタミン」 市場 没食子 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

### 九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葵 選

近作柳構 (10句) 菊沢 小松園 選

課題吟 (各題5句以内)

「過 密」 遠山 可住 選

「ネクタイ」 植村 客遊子 選

「長 屋」 木村 水洞 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字  
は楷書で新かなづかいにしてください。

定価 百八十円 (送料十六円)

半年分 千七百七十円 (送料共)  
一年分 二千二百円 (送料共)

昭和四十七年 五月二十五日印刷  
昭和四十七年 六月 一日発行

大阪府南区巖谷仲之町二〇番地

編集人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪府南区巖谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三九八五番  
振替口座 大阪・三三三六八番

## ・ペンペン草・

★6月号をお送りするが、アッという間に本年も折り返し地点にきた。暑がり屋のぼくにすれば、夏期四か月間は胸つき八丁に突入というわけである。

★最近二十年、三十年の歴史をもつ人たちが息ぎれしてか、落伍していくのはさびしい。視力がおとろえた、考える気力がなくなると訴えてくる。

★野添路氏や静観堂氏は八十歳を越して今なお若々しい句を発表されている。これは氣力の問題であろう。

★戦前、市川市蔵という歌舞伎俳優がいた。この人が栗屋にいる時は足腰が立たず、舞台へ出るときは弟子（でし）二人が両側から付き添ってソデまで連れていく。そこで、登場となるとピンと足腰が立ち、スタスタと舞台へ歩いていくので

ある。〃はり市〃「播磨屋市蔵」といわれるこの名優が、ぼくの友だちのおじさんだったので、その場面をこの目で見たことだが、人間の氣力というものの強じんさに身ふるいするほどの感激をしたものである。川柳家もやってやれないことはないとおもいますが、どうだろうか。

★これも戦前のはなしである。ご承知の方も多いとおもいますが〃人間ポンプ〃とい

### 葉子コーナー

▼道産子の私は六月が懐かしい。鈴蘭狩りなどは忘れられないものです。終戦当時は学校の運動会で村長さんはじめ村中の人たちが走っていたように思います。

▼北海道は六月ごろから一段と美しくなり、望郷の念にかられる今日このごろです。

う芸人がいた。水をバケツから飲んで、2メートルほどききで火をもやし、それを口から水をはきだして消してしまふのだ。

★安全カミソリの刃を一枚ずつのんで、こんどはき出すときは十枚重ねてあったり、赤、白、黒の金魚のみ、容の注文どおりの色の金魚を順々に出して見せたりした。

★この男、食事は流動物だけだった。胃には形のあるものは何もなかったそうである。当時阪大だったかの医師が彼の生命は二年ほどと宣告したが、その後相当長く生きていた。

★彼は、こどもの時分、近くの谷川で遊んでいるうちに、その川にいる雑魚をのんだり、はき出したりしていたとのことだった。

★この〃人間ポンプ〃が、はじめて大阪へ来たとき、まず大阪市岡のP劇場がふ

り出した。その後二人氣上昇して道頓堀などへ進出するのだが、彼がマナージャーと二人でP劇場へ売りこみにきていたとき、ちやうどほくもそこにいあわせて驚いたことがあった。

★〃人間ポンプ〃氏はクドクドとPRせず、P劇場の支配人の前で、ラムネ玉を十口ほどのみ、そのまま首を振ると、オデコのあたりでラムネ玉がサカサガチャ鳴り出した。これにはさすがのペテラン支配人も一発で契約をしたことである。

★彼は二年ほどで死ぬといわれたので、生きているうちにウンと好きなことをしてやれと、ここからさきは成人向きのはなしになっておもしろくなるのだが、新聞へ書いてしまったのでやめておく。

★せっかく川柳の道へはいってきて、ポイとそれをすててしまうのは、なににし

てももったいない。〃やめる〃といわず〃やすむ〃といってもらえると、まだ救いがあるのだが……。

★ちよっとつまずくと〃年だなあ〃という。〃年だなあ〃というのを川柳から禁句にした。

★霞乃先生は〃なにわ〃の柳屋担当ご健在である。★宮中広告よろしくお願いたします。

（不二田一二夫）

疲労回復・肩こり・神経痛に

# アリナミンA

アリナミンAは、ビタミンB1、B6、C、E、K、カルシウム、マグネシウム、亜鉛、銅、マンガン、鉄、コエンザイムQ10、グルタミン酸、グリシン、アラニン、シロイロなどから構成されています。



昭和四十七年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十七年五月二十五日 印刷  
昭和四十七年六月一日発行  
大正十三年通卷五四一號

川柳塔  
六月号

姉妹品大和錦印



# 柔道衣 剣道具

警察庁・警視庁  
全国府県警察  
大阪府警察本部  
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社  
大阪支店

大阪市天王寺区俗人町29番地の1  
電話(779)1690~2番



## 豚饅・焼売・焼餃子

大阪・なんば



TEL (641) 0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心齋橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋  
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストア

定価 百八十円 (送料十六円)